ポスターセッション

3月1日（土）
【ポスター掲示時間】12：30－14：15
【ポスターセッションコアタイム】13：00－14：00

【会場】和顔館　地下１階フロア

FD・SDに関する情報収集、参加者間の交流を目的として、ポスターセッションが行われました。大学コンソーシアム京都加盟大学・短期大学の教員・職員・学生が実施する特色ある教育に関する取り組みを発表しました。

1. 同志社女子大学

テーマ	観光を通した地域連携プログラムの実践事例 ―北海道富良野地域における持続的な課題解決型学習のあり方―	
発表代表者	天野　太郎：同志社女子大学　現代社会学部社会システム学科　教授	
連名発表者	東浦　蒼依：同志社女子大学　現代社会学部社会システム学科　3 年生 大垣　舞依：同志社女子大学　現代社会学部社会システム学科　3 年生 笹沼　栞那：同志社女子大学　現代社会学部社会システム学科　3 年生	
キーワード	観光学	地域連携
	持続可能性	観光動画
発表の概要	本報告は、2004 年から 20 年間にわたり北海道富良野地域において持続的に継続してきている、地域活性化や観光のこれからのあり方を考える地域連携教育プログラムについての報告である。これまでの教育プログラムの目的設定や課題についての概観とともに、2023・24 年度に実施した観光動画作成のプロセスを通して、地域課題の解決方法や地元行政、市民団体との協働のかたち、さらには近年全国各地で課題となっているオーバーツーリズム解決にむけた可能性についての報告を行う。	

観光を通した地域連携プログラムの実践事例
ー北海道富良野地域における持続的な課題解決型学習のあり方ー

同志社女子大学・現代社会学部社会システム学科
東浦　蒼依・大垣　舞依・笹沼　茉那（3年生）・天野太郎（教員）

1：はじめに　報告の目的

本報告は、2005年度から本学で持続的に実施している地域連携型授業・プロジェクト演習（富良野）を取り上げて、プログラムの現状とその特徴を報告する。また、地域連携型の教育プログラムとしての課題について報告を行うものである。

2：授業プログラムの概要

◎地域連携型教育プログラム「プロジェクト演習Ⅰ・Ⅱ」（旧「インターンシップⅡ」）
　は、地域に密着し、地域の問題解決型の実践的授業
◎毎年8月～9月の7泊8日、現地滞在を行い調査・学習
◎対象学年は2年生以上の12名で実施

3：問題意識の変化

「観光」を中心としたプログラム（2006年-2009年）
本学科内「京都学・観光学」コースに対応
観光地域としての富良野
中富良野町　ファーム富田を主体として実施
本学と提携　ラベンダー観光の創設者 富田忠雄氏との関わり

→

環境の変化
1：富良野地域の観光入込客数の減少
2：ファーム富田の受け入れ態勢の変化
3：授業担当者の変更

→

2010年より「観光」
⇓
「まちづくり」・「地域活性化」
に中心テーマをシフト

◎自然観光資源から、ラベンダー、フィルム・ツーリズム（「北の国から」・「風のガーデン」ロケ地）,食観光（オムカレー）、環境保護観光へと、
　つねに新しい資源を、持続的に生み出してきた富良野

◎地域住民自身が活性化し、輝くことで、地域の魅力が増加、その動きこそが地域の魅力となる

⇓

学生と地域住民が交流しながら 女子大生の視点からのまちづくりを学習・提唱・発信！

4：2023・24年度実施のプログラムの特質

①北海道富良野地域の形成について現地でまなぶフィールドワークの実践

◎商店街・商業施設（フラノマルシェ）での調査→商店街側へのフィードバック
◎美瑛　青い池　見学　→防災設備の観光化

②地域を学ぶ力…富良野の地域振興について、観光学・経済学・地理学・まちづくりなど
複合領域からの地域理解のまなざし

③地域住民・行政関係者等との交流
富良野市議会議員の方との意見交換
隣町での地域活性成功例の概要解説　など
市議会・町長・道議会議員・陸上自衛隊・NPOなど

④発信する力…観光動画マップの作成を通した地域の魅力発信
→富良野市役所において提言・発信
市民との交流の場
地域行政への具体的なプレゼンテーション

⑤女子大生独自の視点から見た富良野地域の活性化

1. 富良野地域の現状把握
・行政・地域住民に
　インタビュー
・富良野市議会議長との
　意見交換
・町長等町議会議長をはじめ
　行政からの問題意識
・隣接する市町村や他府県
　での成功事例の調査

▶

2. 課題
・中心市街地の衰退
・キャッチフレーズ
『へそとスキーとワインのまち』
のイメージの弱さ
・観光地間の移動の不便性
・富良野駅から各観光地への
動線の不明確さ

▶

3. 提案
観光動画マップの作成
～中心市街地の新たな魅力の発掘～
・観光地の点と点を繋ぎ、面的に富良野地域を捉える
・地域の人々も知らなかった富良野地域の魅力をアピールする
⇒持続可能な観光のあり方を提供する

5：今後の可能性と諸課題

持続的な教育プログラムを継続していく上で、また地域と連携したプログラムを行う上で以下のような可能性と問題が課題として指摘できる。

◎地域連携-地域への可視的・継続的なメリットの提供
　現在は学生との交流・提言・活動への参画で実現

◎富良野地域の学びや魅力を学生に情報共有
　→学生間のコミュニケーション・理解・関心を高める学生像
　→地域と大学、学生間両面における持続的な連携関係の構築

＊ご清聴・ご覧いただきありがとうございました。ご意見・ご提言いただければ幸いです。

2.　京都外国語大学･京都外国語短期大学

<table>
<tr><td>テーマ</td><td colspan="2">学生が将来を描けるコミュニティ通訳者育成プログラム</td></tr>
<tr><td>発表代表者</td><td colspan="2">佐藤　晶子：京都外国語大学　英米語学科　教授</td></tr>
<tr><td>連名発表者</td><td colspan="2">河野　弘美：京都外国語短期大学　キャリア英語科　教授
アイシュワリヤ･スガンディ：京都外国語大学　英米語学科　准教授
戸田　行彦：京都外国語大学　英米語学科　講師</td></tr>
<tr><td rowspan="2">キーワード</td><td>コミュニティ通訳</td><td>多文化共生社会</td></tr>
<tr><td>地域連携</td><td>キャリア形成</td></tr>
<tr><td>発表の概要</td><td colspan="2">第 29 回 FD フォーラムポスター発表にて次の 2 課題が浮かび上がった。
①コミュニティ通訳の認知度を教職員で広める。
②外国語大学卒業後の進路として「コミュニティ通訳者」育成を目指し、
近隣地域や社会に貢献する人材を育てる方法を検討する。
本ポスター発表では、それらの課題点に着目し、2024 年度に実施したコミュニティ通訳の認知度を広める活動を通して、学生と教職員のコミュニティ通訳に対する認知度にどのような影響があったかを報告する。また、コミュニティ通訳の専門 6 領域の現状を可能なかぎり把握し、その結果をまとめ、2025 年度の広報に活用すべく、学生が描く未来の自分と京都外国語大学のコミュニティ通訳育成者プログラムとの関連性を強めるシステムについて考察した結果を紹介する。
コミュニティ通訳の専門領域の調査のまとめは、2025 年度に学生にむけた更なる具体的な認知度をより広める活動に活用していく予定とする。</td></tr>
</table>

学生が将来を描けるコミュニティ通訳者育成プログラム

佐藤晶子*　河野弘美**　アイシュワリヤ　スガンディ*　戸田行彦*

2025.03.01.　*京都外国語大学外国語学部**京都外国語短期大学キャリア英語科

【倫理的配慮】本研究に関しては、京都外国語大学倫理調査委員会における倫理審査を受け、承認されています（管理番号2024-18）

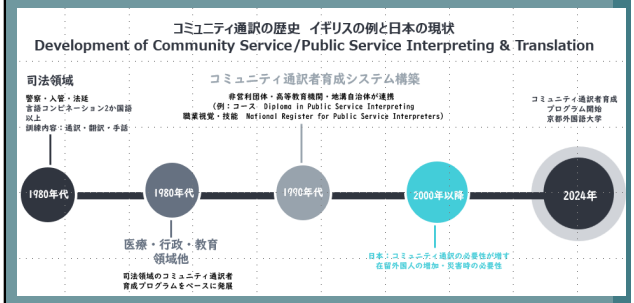
コミュニティ通訳とは

『ISO13611:2014』（※ISO：国際標準化機構ー世界で169カ国が加盟）→community interpreting / public service interpreting：”bidirectional interpreting that takes place in communicative settings (2.2.3) among speakers of different languages for the purpose of accessing community services” (ISO, 2014, p.2)

『ISO13611:2024』→community interpreting / public service interpreting：“interpreting that enables people to access services available to society as a whole, and which they would otherwise be unable to access owing to a barrier to communication resulting from the use of different languages ” (ISO, 2024, p.2)

>> 2014年版は双方向通訳を前提にコミュニティサービスの利用を目的とする一方、2024年版は社会全体のサービスへのアクセスを可能にする通訳と広く定義し、言語の違いによるコミュニケーション障壁の解消を重視している。時代の趨勢に即した定義へ。Critical Link International（1992年設立）会員による定義：個人の最もプライベートな領域に踏み込む通訳で、医療、福祉、司法（警察、刑務所、法廷）などを含む（Schjoldager, 1998, p.11）愛知県立大学：法廷・医療・教育・福祉など公的サービスの場で、公的機関と外国人住民の間のコミュニケーションを可能にする通訳（吉田, 2022, p.1）

JAITS会員：外交やビジネスの場のフォーマルな場に対し、外国人の地域生活に根ざした分野のインフォーマルな場での通訳（飯田, 2016, pp.1-2）



コミュニティ通訳に必要な基本技能

- 通訳を超えた言語＋コミュニティ通訳者の技能
- Cultural Mediator (CM)としての役割
- 双方をつなぐ相談者としての役割

コミュニティ通訳主要4領域と専門性と難易度

行政・学校教育・医療・司法

専門性と難易度が高い➡命に係わる傾向が強い医療・司法

京都外国語大学の専門性を活かす一つの方法

➡外国語・教職課程（資格）・公共政策（キャリアスタディ）➡行政・学校教育

Cultural Mediator　(CM)　としての役割　＋　各領域間の連携

行政 Public Services

1. 外国人支援
- 行政手続きの支援
- 各種生活相談の言語サポート

2. 災害時ボランティア
- 避難所で多言語による情報提供と通訳支援
- 救援物資の配布や医療支援の言語サポート

3. 交流イベント
- 地域住民と外国人住民の交流会での相互理解促進
- 文化的背景の説明や相互理解の促進

学校教育 Education

1. 生徒支援
- 学校での困り感を解消
- 学校生活の言語サポート

2. 保護者支援
- 学校と家庭をつなぐ多言語による情報提供と通訳支援

3. 学校支援
- 三者懇談や学校行事への理解と教師への支援

医療 Healthcare Services

1.医療機関（病院・クリニック・保健所）
- 医療用語の適切な通訳と説明
- 医療費（保険等）

2. 医療領域で需要の高い言語

電話通訳：英語・中国語
ベトナム語・ネパール語

通訳機器等での利用言語：
英語・中国語・スペイン語
（2020年：日本医師会）

司法 Legal Settings

1. 警察
取り調べ・捜査現場

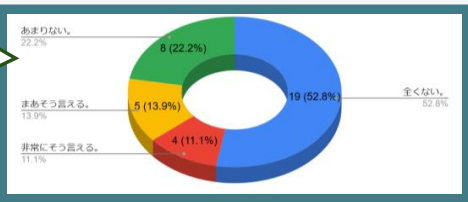
2. 裁判
法廷（刑事・民事・家庭など）・調停室・検察・厚生施設など

3. 難民認定関連
出入国関連機関

法廷での通訳言語使用頻度の高い例（2021年度：法務省調べ）ベトナム語・中国語・タイ語・タガログ語・ポルトガル語・英語等

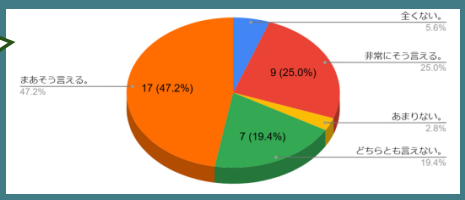
「学校教育」現場のコミュニティ通訳に関する認知度調査
教員（小・中・高）向けアンケート（36名）
2025年1月実施　グーグルフォーム

コミュニティ通訳を知っていますか？



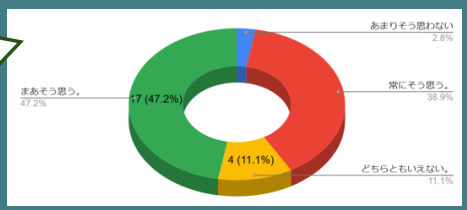
75%が知らない

コミュニティ通訳は重要だと思いますか？



72%が重要だ

コミュニティ通訳を多くの人に周知することが必要だと思いますか？



86%が要周知

コミュニティ通訳に関する教職員の意識調査(自由回答)

本学教職員（40名）の反応（2025年1月）

プログラムへの高い関心と期待が示され、学生への周知拡大や大学トップページへのアイコン設置など具体的な提案があった。社会的ニーズと本学での取り組みを評価する声が多く、セカンドキャリアとしての価値も指摘された。

小中高校教員（36名）の具体的イメージ（2025年1月）

学校での三者懇談や保護者対応に有益との評価がある一方、通訳者不足や認知度の低さが指摘された。行政サービスや医療現場での需要も認識され、報酬面での課題も挙げられた。

小中高校教員（36名）のコミュニケーションの課題（2025年1月）

進路指導や奨学金説明などの複雑な内容伝達の困難さ、生徒本人が通訳する場合の意図的な誤訳、文化的背景による理解の違いが主な課題として挙げられた。

小中高校教員（36名）の活用希望場面（2025年1月）

三者懇談、進路指導、生徒指導での活用希望が多く、日常的な学校生活支援や保護者会での活用も期待されている。具体的な運用方法への質問も多く寄せられた。

小中高校教員（36名）の導入における課題（2025年1月）

予算確保や手続きの煩雑さが最も多く、通訳者の学校現場への理解度や守秘義務の問題、学校内での必要性の理解促進なども課題として指摘された。

※上記の結果では、コミュニティ通訳を利用している学校と利用していない学校で地域間の差が見られた。

総括

学生が未来を描ける職業にするためには職業の現場でのコミュニティ通訳の認知度が不可欠であることが示唆された。
前年度の課題であった学内での認知度向上プロジェクトは進行中である。

23年度の課題「コミュニティ通訳の認知度を学内で上げる」への対策として実施事項

学生向け説明会・情報配信（オンライン・紙媒体）

学内関係部署間打ち合わせ　　コミュニティ通訳・プログラム

公開講座
学内FD

1. 100時間以上
2. 対面 6回
3. 2024.03-現在 オンライン公開 紙媒体適宜
4. 春1回、秋1回 23年度1回、24年度1回

ホームページ開設

3. 龍谷大学

テーマ	ICT 活用教育における学修成果の可視化による主体的な学びへの効果	
発表代表者	栢木 紀哉:龍谷大学 経営学部 准教授	
連名発表者	西岡 久充:龍谷大学 経営学部 教授 林 千宏:龍谷大学 経営学部 講師	
キーワード	ICT 活用教育	学修成果の可視化
	主体的な学び	アンケート調査
発表の概要	近年、学校教育において、学修成果の可視化に関する議論が活発に行われている。大学教育においても、学修者が「何を学び、身につけることができるのか」を明確にし、学修の成果を学修者が実感できる教育の実現が求められている。経営学部では、学生のオフィス系ソフトウェアの習熟度とICT に関する学習経験の把握を目的として、入学直後に「基礎能力判定試験」を実施している。本報告では、「基礎能力判定試験」の結果を視覚的に確認できる形で学生にフィードバックして学修計画を立てさせることで、学生の ICT 活用に対する学修意欲や主体的な学びにどのような影響を及ぼすのかについて分析を進めた結果を報告する。また、評価項目ごとに求められるスキルレベルを分析し、過年度との比較を通して、どのような変化がみられるのかを検証する。	

第30回FD・SDフォーラム　ポスターセッション

ICT 活用教育における学修成果の可視化による主体的な学びへの効果

The effects on active learning through the visualization of learning outcomes in ICT literacy

栢木紀哉，西岡久充，林千宏（龍谷大学経営学部）

報告の概要

近年、学修成果の可視化に関する議論が活発に行われている。多くの大学で取り組まれるようになった授業評価アンケートやGPA（Grade Point Average）など、様々な指標を用いた学修成果・教育成果の把握・可視化は、大学における教学マネジメントの確立に必要な情報とされている。本研究では、初年次情報教育の学修到達度を学生自身が確認できるように可視化することで、学生の主体的な学びにどのような影響を及ぼすのかを明らかにする。授業前の試験の結果を学生にフィードバックし、学生の主体的に学ぼうとする学修意欲にどのような影響を及ぼすのか、授業後の試験の結果に変化がみられるのかを考察する。

研究の方法

経営学部では、学生のオフィス系ソフトウェアの習熟度の調査を目的として、初年次情報教育の中で習熟度確認試験を実施している。本研究では、1年次開講科目「情報リテラシー」授業前の「基礎能力判定試験（1回目）」の結果と、授業後の「単位認定試験（2回目）」の結果を学修成果としてレーダーチャートに可視化することで、学生の学修意欲にどのように影響するのかを分析した。

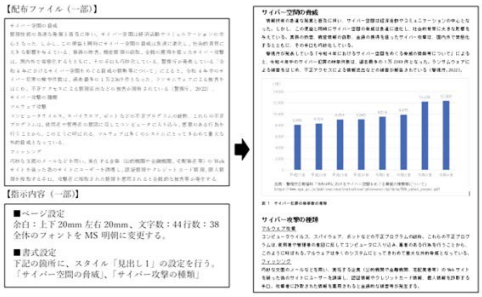


図1　Wordの試験問題例（一部）

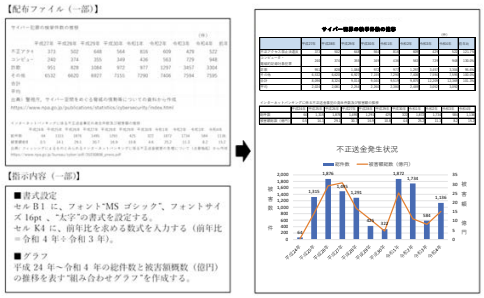


図2　Excelの試験問題例（一部）

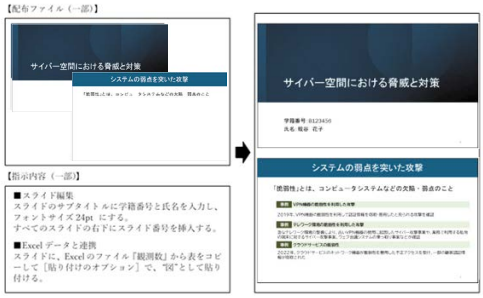


図3　PowerPointの試験問題例（一部）

新入生を対象として実施した「基礎能力判定試験（1回目）」のWord編（図1）、Excel編（図2）、PowerPoint編（図3）の得点データを集計し、単元ごとに得点傾向を捉えた。学生に「基礎能力判定試験（1回目）」の結果をフィードバックし、それぞれについて学修目標を立てさせた。また、「単位認定試験（2回目）」を実施した後、学修目標をもとにした学修到達度について自己分析させた。これらの結果をもとに、学修成果の可視化によって学生の主体的学びに対する意識に変化がみられるのかを調べた。

結果の分析

本報告では、Word編の試験を取り上げ、得点率・自己分析の結果について報告する。Word編は11の採点項目で構成されているが、学生がフィードバックの内容を把握しやすいように、表1に示す6つの単元で表すこととした。また、学生の得点と全体の平均得点を得点率として1つのレーダーチャートに示すことで、学修到達度を容易に把握できるようにした。

表1　Word編の単元

単元	ページ設定	書式設定	図・画像	表	ページ番号	脚注・図表番号	合計
項目	余白の設定、ページ設定、改ページ	フォントの設定、見出し設定、インデント	画像の挿入・調整、グラフの挿入・調整	表の挿入、列幅変更、セル内の文字配置	ページ番号挿入・設定	脚注の挿入・書式設定	
配点	20	24	20	12	12	12	100

【試験結果】

授業前に実施した「基礎能力判定試験（1回目）」の合計得点について平均以上と平均未満で2つの群に分け、授業後に実施した「単位認定試験（2回目）」との各単元の得点率を比較した。2群の得点率は、図4（平均以上の群）、図5（平均未満の群）に示す結果となった。対応のあるt検定を行った結果、すべての単元で授業後の試験（2回目）の得点が有意に高かった。

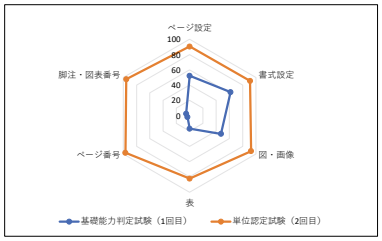


図4　Word編の得点率（平均以上群）

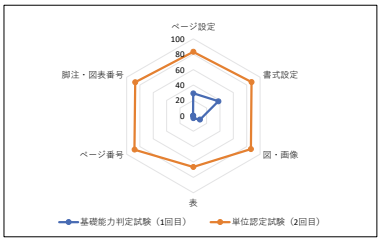


図5　Word編の得点率（平均未満群）

【学修目標と自己評価の結果】

「基礎能力判定試験（1回目）」の後に学生が行った自己評価の結果（表2）、および立てた学修目標と授業後の自己評価の自由記述について2群の傾向を分析した結果（図6, 図7）を示す。自由記述は、特徴を見出すために対応分析を行った。分析にはKHCoder3（樋口, 2020）を使用した。

表2　Word編の自己評価（平均値）

	ページ設定	書式設定	図・画像	表	ページ番号	脚注・図表番号
平均以上の群	3.34	3.76	3.35	3.00	3.04	2.64
平均未満の群	2.46	2.88	2.49	2.33	2.42	2.11

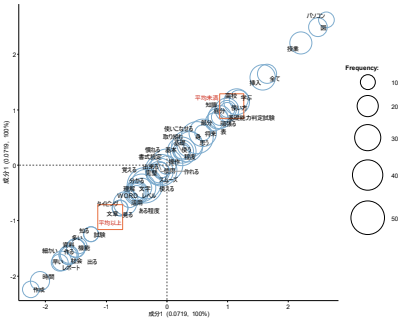


図6　授業前に立てた学修目標（Word編）

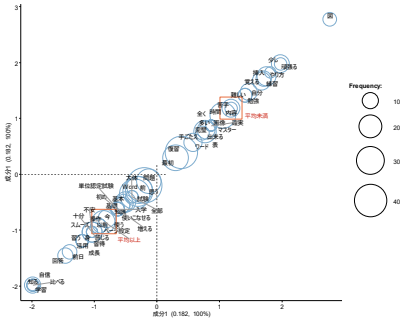


図7　学修目標に対する自己評価（Word編）

考察とまとめ

本研究では、学修成果の可視化は学生の学修意欲にどのような影響を及ぼすのかを分析し、今後の教育内容の改善に生かすことを目的とした。「基礎能力判定試験（1回目）」の到達度を分析した結果、複数の単元で得点率が10%を下回っており、大学入学までの学習内容の定着度の低さが目立つ結果となった。また、試験（1回目）の合計得点で平均以上と平均未満の2つの群に分けて学修目標の記述内容を分析した結果、2群の内容に異なる傾向がみられた。

謝辞：本研究は、2024年度 龍谷大学 自己応募研究プロジェクトによる助成を受けた研究の一部である

連絡先：栢木紀哉，〒612-8577 京都市伏見区深草塚本町67，Tel 075-642-1111，E-mail: kayaki@biz.ryukoku.ac.jp

4. 京都産業大学

テーマ	グローバルコモンズ学生ボランティアスタッフ「LINK」実践報告 ～主体的な活動を通じた学生の学び～	
発表代表者	ハフマン　美亜 京都産業大学　教育支援研究開発センター事務室（グローバルコモンズ）職員	
連名発表者	中村　真聡：京都産業大学　国際関係学部国際関係学科　4 年 コウ　キドウ：京都産業大学　外国語学部アジア言語学科 日本語・コミュニケーション専攻　4 年 原田　優音：京都産業大学　外国語学部ヨーロッパ言語学科　スペイン語専攻　3 年 栗山　愛彩：京都産業大学　外国語学部英語学科　イングリッシュキャリア専攻　2 年 山元　柊奈：京都産業大学　外国語学部英語学科　イングリッシュキャリア専攻　2 年 杉江　昌子：京都産業大学　教育支援研究開発センター事務室 グローバルコモンズ　学習支援担当 レイシー　アンドレア：京都産業大学　教育支援研究開発センター事務室 グローバルコモンズ　学習支援担当	
キーワード	学生スタッフ	グローバルコモンズ
	主体的な学び	異文化交流イベント
発表の概要	京都産業大学グローバルコモンズ（GC）の学生ボランティアスタッフ「LINK」は、「学内にグローバルマインドを広げること」をミッションに、2021 年 4 月に活動を開始した。活動開始当初から継続して開催している英語ディスカッションイベントをはじめ、参加者の興味やニーズに合わせて、様々な多言語イベントや留学生を対象とした異文化交流イベントを実施し、自身と参加者の語学力や異文化理解力の向上を目指している。本発表では、英語ディスカッションイベントと異文化交流イベントに焦点を当て、LINK が楽しく活気あるイベントを継続的に実施するために行っている工夫やメンバー間の協力体制、参加者ニーズを反映した改善努力について紹介する。また、アンケート結果を基に、イベントが参加者の成長と学びにどのように貢献しているかを分析し、学生の主体的な取り組みの実践例として発表する。	

グローバルコモンズ学生ボランティアスタッフ「LINK」実践報告
～主体的な活動を通じた学生の学び～

むすんで、うみだす。
京都産業大学

【発表者】
ハフマン 美亜　（教育支援研究開発センター事務室 グローバルコモンズ学習支援担当）
杉江 昌子　（教育支援研究開発センター事務室 グローバルコモンズ学習支援担当）
アンドレア・レイシー（教育支援研究開発センター事務室 グローバルコモンズ学習支援担当）
中村 真聡　（国際関係学部 国際関係学科 4年）
コウ キドウ（外国語学部 アジア言語学科 日本語・コミュニケーション専攻 4年）
原田 優音　（外国語学部 ヨーロッパ言語学科 スペイン語専攻 3年）
栗山 愛彩　（外国語学部 英語学科 イングリッシュキャリア専攻 2年）
山元 柊奈　（外国語学部 英語学科 イングリッシュキャリア専攻 2年）

英語系イベント

Discussion in English

【開催日時】
毎週：
水13:15~14:15
木13:15~14:15
木15:00~16:00

【概要】
「英語を使う場を提供すること」を目的として2021年4月に開始し、継続的に実施している人気の英語イベント。少人数のグループに分かれて、様々なトピックについて英語でディスカッションする。

【2024年度実績】
担当LINK数：13名　参加者数（延べ）：746名

参加者全員が輪になって自己紹介をする

グループに分かれて、英語でDiscusssion！

DIG INTO International Issues!

【開催日時】
隔週：
木15:00~16:00

【概要】
国際問題を英語で議論する場を提供することを目的として、2022年5月に開始した上級者向けイベント。様々な学部の学生が参加する。

【2024年度実績】
担当LINK数：4名　参加者数（延べ）：121名

担当者がトピックについて、参加者に説明する

担当者が提示した問いを元に議論する参加者

多言語系イベント

日本語で話そう！

【開催日時】
毎週：
水15:00~16:00

【概要】
留学生を対象に、日本語を使って楽しく会話する場を提供することを目的とするイベント。日本語レベルに合わせてフリートークや、カルタ・けん玉のような日本の遊びを取り入れて会話をする。

定期開催イベントにて会話ゲームを楽しむ

【イベント開催の変遷】
2022年５～６月:「Chat in Japanese」を3回開催
2022年11月:「日本語で話そう！」として、定期開催イベントになる。
2024年10月: 上記に加え、留学生からのニーズに合わせて、少人数（２～3名）で開催をスタート

留学生のニーズに合わせて少人数で開催！

【2024年度実績】

	定期開催	少人数開催
担当LINK数	5名	7名
参加者数（延べ）	227名	58名

スペイン語で話そう！

【開催日時】
毎週：
水12:30~13:00

【概要】
スペイン語で話す場を提供することを目的に、2023年5月に開始。スペイン語で会話をしたり、カードゲームで遊んだりする。
主に、スペイン語に興味があり、学習したい本学の学生の参加が多いが、2024年秋学期は、スペイン語学習経験のある留学生の参加も目立った。

カードゲームを使って会話練習

【2024年度実績】
担当LINK数　：　1名
参加者数(延べ)：31名

スペイン語学習者の留学生も交えてスペイン語で会話

異文化交流系イベント

HANAMI FEST

【概要】
新歓祭の期間中、新入生・交換留学生を対象に、英語や他の外国語による交流イベント。
開催時期：4月
【2024年度実績】
担当LINK数：　9名
参加者数　：96名

満開の桜の元、多言語でおしゃべり

WELCOME FEST

【概要】
秋学期に来日する交換留学生の歓迎イベント。会話やゲーム、日本文化紹介を通して交流を深める。
開催時期：9月
【2024年度実績】
担当LINK数：20名
参加者数　：82名

ゲームを通して仲を深める参加者

HALLOWEEN FEST

【概要】
ハロウィンを祝う異文化交流イベント。参加者は、仮装してクイズやアクティビティを楽しむ。
開催時期：10月
【2024年度実績】
担当LINK数：11名
参加者数　：47名

仮装をしてクイズを楽しむ参加者

アンケート調査の概要

英語系イベント

目的：参加者の満足度や要望を知りイベントの改善につなげる
調査対象：2024年度英語ディスカッションイベントの参加者
回答者数：36名

日本語で話そう！

目的：参加者の満足度や要望を知りイベントの改善につなげる
調査対象：2024年度 「日本語で話そう！」（定期・少人数開催）参加者
回答者数：11名

活動の振り返り

学び・気づき

- **外国語能力**の向上はもちろん、イベントの企画や運営を通じて、メンバーと連携し、**主体性**と**協働する力**が高められた。
- 外国語や異文化に興味のある学生の**居場所**を提供し、学生同士で**励まし合い**、活動への意欲を高め合った。
- 多様な社会的・文化的背景を持つ学生との交流を通じて**異文化理解**を深め、**視野を広げる**ことができた。

課題と展望

- 参加人数の増加により、**幅広いトピック**と**レベル分け**が必要になった。
- 初めてでも**参加しやすい雰囲気を作る**ための工夫が必要である。
- イベント活動をより維持・発展させるため、**新メンバーの育成**する必要がある。
- 現在の**イベントを継承**しつつ、参加者の需要に合わせた企画を作成していきたい。

アンケート結果・発表に関する資料

5. 同志社女子大学

テーマ	学科開講インターンシップにおける実習－和菓子屋での起業体験－	
発表代表者	大倉　真人：同志社女子大学　現代社会学部社会システム学科　教授	
連名発表者		
キーワード	インターンシップ	実習
	起業体験	和菓子屋
発表の概要	近年において日本社会は急速なスピードで変遷しており、それに伴い人々の働き方にも大きな変化が生じている。その潮流の中で、自らが企業を設立する「起業」に転じる人も少なくなく、起業された企業の中には、新しいアイデアや独自の技術などを武器に大きく成長を遂げたものも少なくない。さらに女性による起業が増加傾向にあり、これによって「女性の視点」を活かしたビジネスが誕生し続けていることも無視できない。 本報告では、上で述べた背景を基礎に発表者が 2024 年度に授業担当教員をつとめた所属学科で開講されたインターンシップ（和菓子屋での起業体験）における実習の内容を紹介するものである。なおこのインターンシップは、京都府城陽市にある「御菓子司　松屋」の協力の下、起業の全体像を体験的に知るとともに、マーケティングや損益計算といった起業において個別に必要とされる知識についても学ぶ機会を与える内容となっている。	

学科開講インターンシップにおける実習－和菓子屋での起業体験－

同志社女子大学 現代社会学部 社会システム学科　大倉真人

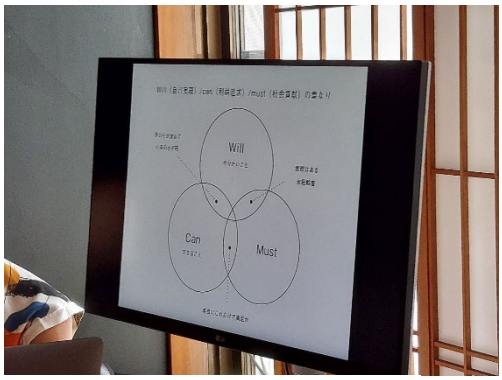
実習期間：2024 年 8 月 23 日（金）～26 日（月）および 28 日（水）～31 日（土）（計 8 日）
実習先：御菓子司 松屋（京都府城陽市）
参加学生：社会システム学科 3 年生 6 名

製造作業研修の様子

松屋社長の指導の下、様々な和菓子の製造作業研修を行いました。

座学研修の様子

起業する際に不可欠な会計、PR、ブランディングについての研修を行いました。



1 日限定の店舗経営を体験

学生自らが開発した商品を自分たちで経営する店舗において販売することを通じて、起業を体験しました。

最終報告会を実施

今年 2 月に参加学生による最終報告会を実施しました。

発表動画
（32 分 16 秒）

6. 龍谷大学

<table>
<tr><td>テーマ</td><td colspan="2">DP の実質化を目指した、学生本人による学修状況可視化ツールの開発</td></tr>
<tr><td>発表代表者</td><td colspan="2">築地 達郎：龍谷大学 社会学部 准教授</td></tr>
<tr><td>連名発表者</td><td colspan="2">出羽 孝行：龍谷大学 文学部 教授
栢木 紀哉：龍谷大学 経営学部 准教授
寺川 史朗：龍谷大学 法学部 教授
只友 景士：龍谷大学 政策学部 教授
瀧本 眞人：龍谷大学 国際学部 教授
生駒 幸子：龍谷大学 短期大学部 准教授</td></tr>
<tr><td rowspan="2">キーワード</td><td>DP 卒業時の到達目標を達成するために必要な学修</td><td>学生が DP と各科目の関連を把握する</td></tr>
<tr><td>自身の学修状況を把握</td><td></td></tr>
<tr><td>発表の概要</td><td colspan="2">この研究は、学生が各年次やセメスターにおいて、DP（卒業時の到達目標）に対する自己評価を行い、その差を埋めるために必要な学修内容を主体的に認識できるよう支援することを目的としている。現在、本学の DP は科目と紐づけて学生に提示されていないため、学生が日々の学習の中で DP を意識し続けることが困難な状況にある。そこで、他大学の DP 提示状況を調査し、それを参考に本学の DP 提示状況を検証した。その結果を基に、社会学部コミュニティマネジメント学科において、学生が自身の学修状況を自己点検できる「DP 概要版」を作成し、Excel のレーダーチャート機能を用いた可視化ツールを試行した。このツールにより、学生が自らの学修成果を測定し、主体的な学びを促進することを期待している。</td></tr>
</table>

DPの実質化を目指した学生本人による学修状況可視化ツールの開発

発表代表者 築地 達郎 社会学部・准教授

連名発表者 出羽 孝行 文学部・教授　栢木 紀哉 経営学部・准教授
寺川 史朗 法学部・教授　只友 景士 政策学部・教授
瀧本 眞人 国際学部・教授　生駒 幸子 短期大学部・准教授

研究の目的

学修者本位の学習を支援するためには、学生自身が各年次、各セメスターにおいてDP（卒業時の到達目標）に対して自分がどのレベルにあり、その差を解消するために必要な学修内容を主体的に認知することが重要である。しかし現在の本学では、DPと開講科目との関連が学生に分かりやすく提示されているとは、残念ながら言えない。

そのため、DPと各科目との関連を把握しやすくするために、「DP概要版」を提案することにした。

さらにこのDP概要版を用いて、学生自身が活用可能なExcelを用い、学修状況を主体的に把握できる可視化ツールを開発する。

研究内容

国内では、中教審の2005年答申『我が国の高等教育の将来像』、2008年答申『学士課程教育の構築に向けて』を経て「3つのポリシー」に関する考え方が定式化された。並行して文科省が2011年度から大学の教育情報の公表義務化を行ったことから、多くの大学において3つのポリシーが策定されることになった。

その後、2013年に首相を議長とする教育再生実行会議が『高等学校教育と大学教育との接続・大学入学者選抜の在り方について（第4次提言）』を公表したことが契機となり、2016年、3つのポリシーの策定・公表が法令によって義務化された。文科省は同年、『ガイドライン』を公表し、各大学は2017年度末までに3つのポリシーの「一体的策定」を行って2018年度から公表している。本学においても2009年度に全教学主体において3つのポリシーを策定、2017年度に一体的見直しを行って現在に至っている。

学習者にとっては、3つのポリシーの中でも「ディプロマポリシー」(DP)が目標設定のために特に重要である。各教育機関は自らのDPを学習者と積極的に共有し、その理解の深化に努める責務がある。そうした考え方から、少なくない大学において、DPの内容や表現方法が改善され、学生の主体的な学習を支える基盤として機能される努力が続けられている。

ところが、本学において現在用いられているDPは2009年度当時の内容や表現を色濃く残しており、学生のみならず教育職員にとっても分かりにくく、学習目標・教育目標に紐付けることが困難なままとなっている。

そこで、①他大学におけるDP提示の実態調査を行い、②それを参照点としながら本学におけるDP提示状況を批判的に検証し、③本学の建学の精神や教育理念に即し学生・教員が共有しやすい「DP概要版」を検討することにした。併せて、④最も普及したアプリケーションであるExcelを用いて学生自身が自己点検できるツールの開発を行った。

研究成果

①他大学におけるDP提示の実態調査

全学的なDPを策定・提示している大学と、学部・学科単位のDP提示にとどめる大学とに大別されることが分かった。私立大学の場合、全学的なDPはいずれもその建学の精神と直結した形で構築されている。

また、多くの大学においてDPは数項目に整理され、「（学生が）～できること」、「（学生が）～を身につけている」、「（学生が獲得する）～の能力」といった表現によって、学生の到達目標として提示されている。

②本学におけるDP提示状況の批判的検討

本学は全学的なDPが策定されておらず、従って建学の精神と学生の学習目標とが直接紐付けられていない。各学部・学科ごとのDPには共通に「建学の精神の意義について理解している」という項目が掲げられているのみである。

他方、学部・学科ごとのDPは、2008年当時に定式化された方式（マトリックス型）で記述されている。この方式「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「主体性・多様性・協働性」などが階層化されている同時に、外国語学習、教養教育、専門教育などに分けて記述されており、学生個々の到達目標として認識しにくい状態にある。

③「DP概要版」の検討と自己点検ツールへの展開

社会学部執行部の了承を得て、同学部コミュニティマネジメント学科のDPを分析した。それに基づいて、概要版を案出した。さらに、Excelのレーダーチャート機能を用いて学生自らが達成度をチェックできるツールを開発した。

コミュニティマネジメント学科のDP概要版案

1. **建学の精神に即して、諸学の基本と異文化理解への態度を身につけている。**
2. **社会の現場や現実に関する体験に基づいて、自ら学修目標を策定しようとする態度を身につけている。**
3. **問題解決への志向を育むことによって、生涯を通した持続的な職業力を身につけている。**

社会学部コミュニティマネジメント学科DPの
マインドマップ法による分析

今後の課題

多くの大学で取り組まれているように、本学においても全学的なDPの策定が求められる。そのためには、「建学の精神の意義の理解」はいかにして達成されるか、ということに関する教育論的な整理が必要であろう。本学の建学の精神は浄土真宗の精神＝親鸞精神と同一であることから、これを教育活動＝学修支援活動の総体として実現するという合意と、それに基づくカリキュラムポリシー(CP)の策定が求められる。

今回は社会学部コミュニティマネジメント学科における概要版の案出にとどまったが、同案および他大学のDP事例を参照しながら、全学DPの策定と、各学部・学科におけるDP概要版の策定を進めることが必要であろう。

その際、DPの各項目は学生の「学修到達目標」に因数分解されて提示されるべきである。また、各目標項目に対応した「達成度」を併せて示すことにより、CPがDPと有機的に結びつけられて構築されていくよう、配慮すべきである。

さらに、学生が継続的な自己点検を行うことを可能とするツールの開発が必要である。Excelを用いる方法は簡易かつ作成したデータを持続的に保持することを担保するため、一定程度有効である。しかし、学生自身が課外活動や他大学•他学部などでの複線的な学習によって獲得した学修成果とも連結し、さらには生涯に亘って活用できるようにするためには、なんらかのデータベース化（ポートフォリオ化）が必要となるであろう。そうしたシステムの構築に向けた、戦略的な大学間連携が求められる。

学生本人による卒業段階学修成果評価を通じたDPとキャリア形成支援の実質化

発表代表者 築地 達郎 社会学部・准教授

連名発表者 出羽 孝行 文学部・教授　栢木 紀哉 経営学部・准教授
寺川 史朗 法学部・教授　只友 景士 政策学部・教授
瀧本 眞人 国際学部・教授　生駒 幸子 短期大学部・准教授

研究の目的

本研究の目的は、学生個々の4年間の学修成果をDPに紐付けながら客観的に可視化し、本人が把握可能な情報とすることである。それを通じて、DPの実質化と生涯に亘るキャリア支援の深化に向けた契機づくりを目指す。

本学においてはDP到達状況を把握するために、例年学生アンケートを行ってきた。

しかし、本学のDPの構成が過度に複雑であるため、学生がその内容を理解し自身の学修成果を主体的に評価することは困難な状況が続いている。そこで本研究では、2023年度プロジェクトにおいて検討したDP簡易版とGPS-Academicテストを組み合わせて卒業研究提出直後に実施することによって、学生、大学の双方にとって有益な可視化を実現することとした。

研究内容

これまで入学時と3年次のみに実施しているGPS-Academicテストを卒業研究・卒業論文提出直後においても実施し、学生個々の4年間全体の学修成果の可視化を行った。3年次にGPSを受検しているか否かは問わずに実施し、「1年次⇒3年次⇒4年卒業時」または「1年次⇒4年卒業時」の遷移を可視化した。今回はとくに、研究活動を通じた教育がもたらす学修効果にも着目するために、卒研・卒論が必修となっている社会学部生のみを対象に、卒研・卒論提出時に受検を求めた。

GPS-Academicテストは①「考え抜く力＝志向スキル」②「他者と関わり合いながら働く力＝姿勢・態度」③「前に踏み出す経験」――の3軸で学生個々の特性を数値化しようとする検定試験である。このうち①②は客観評価、③は主観評価である今回は併せて、4年卒業研究提出・卒業論文直後における意識調査（大学満足度、カリキュラム評価など）も行った。

当初は独自のDP簡易版に基づくアンケート調査を実施し学生個々のDP到達度を可視化することを計画したが、社会学部には学部共有のDPが存在せず、3学科固有のDPには相当な差異があることから、残念ながら一体的なDP簡易版作成は見送った。ただし、3学科のDPとGPS-Academicの評価軸との間には高い共通性がみられることから、今回はGPS-Academicを代替的に用いてDPに対する学習成果の可視化を行うことにした。

受検結果の分析に当たっては、GPS-Academic実施主体である株式会社ベネッセi-キャリアの協力を受けた。

研究成果

今回の受検者は3学科計で100名だった。このうち、3回（1年次・3年次・4年卒業時）継続して受検した受検者77名（卒研・卒論の全提出者に対する比率は約13%）のデータを分析した。

それによると、3年次から4年卒業時にかけて、「レジリエンス」「経験総合」の数値が上昇している。また、「思考力総合」は4年卒業時にかけて数値が低下しているが、全国の全受検者平均との差分は大きくなっている。すなわち、全体として4年間の後半における学修活動が学修成果に一定の影響を与えた可能性が想定される。（図1）

また、「経験」に関する主観評価をみると、「難しいと思えることでも挑戦した」「議論（話し合い）の場では何が課題で何を解決すべきかを明らかにするようにした」など項目で4年卒業時にかけて大きく伸長している。（図2）

図1　GPS-Academic受検結果の年次推移

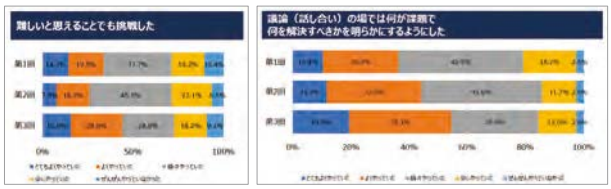


図2　「経験」に関する主観評価の年次推移（抜粋）

こうした結果について、ベネッセi-キャリアは「思考力やレジリエンス、リーダーシップ、コラボレーション、対人関係、多様性を受容する経験といった項目について伸びが見られ、DPに掲げられている基礎的な知識（思考力）、主体性、多様性について、学部教育で伸ばしていると言えそう」と分析している。

意識調査では、以下の諸点が高スコアであった。
①普段から自分なりの意見や視点を持とうとしている ②難しいと思えることも挑戦した ③ストレスを感じたとき、その問題と向き合い克服した ④議論（話し合い）の場では何が課題で何を解決すべきかを明らかにするようにした。

今後の課題

今回は3年次から4年次にかけて行われる卒研・卒論のための研究活動が学修効果をもたらすことを前提（仮説）として、調査を行った。調査結果はこの前提を支持するものであったように思われる。しかし、この期間に多くの学生が就職活動を行って社会性が高まることを鑑みると、他の要因の影響を排除できない。

すなわち、卒研・卒論がDPにおいてどのような役割を持つかを明示的に示さなければ、その効果は検証できないといえる。またこのDPに基づいてCPを再構築することも求められるといえる。今回、学生個々が自分自身の4年間の学修成果を全国の学生とも比較しつつ可視化することができた。

このようにして得られるデータを全学レベルで統計的により仔細に分析することができれば、本学が持つ教学資源を客観的に把握することができるであろう。これまでは1年次から3年次にかけての可視化しかできていなかったが、これに4年卒業時のデータを加えることによって、学部4年間の後半における教育のあり方（カリキュラム、学習環境、人員配置など）をより的確に検討できるようになるものと思われる。そのためには検定試験の実施回数を増やす必要があり、そのための予算措置を検討することが求められる。

また、今回行ったような卒業時における検定試験の成果を、学生本人がその後のキャリア形成に生かしていけるような環境整備も求められる。

7. 京都産業大学

テーマ	グローバルコモンズ学生ボランティアスタッフ「LINK」実践報告 ～多言語イベントを通じた学生の主体的な学び～	
発表代表者	杉江　昌子 京都産業大学　教育支援研究開発センター事務室（グローバルコモンズ）職員	
連名発表者	船山　凌雅：京都産業大学　外国語学部　ヨーロッパ言語学科　ロシア語専攻　4 年 吉本　航基：京都産業大学　外国語学部　ヨーロッパ言語学科　ロシア語専攻　4 年 河野　聖　：京都産業大学　外国語学部　ヨーロッパ言語学科　ロシア語専攻　4 年 レイシー　アンドレア：京都産業大学　教育支援研究開発センター事務室 グローバルコモンズ　学習支援担当 ハフマン　美亜　　：京都産業大学　教育支援研究開発センター事務室 グローバルコモンズ　学習支援担当	
キーワード	学生スタッフ	グローバルコモンズ
	主体的な学び	多言語イベント
発表の概要	京都産業大学グローバルコモンズ学生ボランティアスタッフ「LINK」は、2021 年 4 月の活動開始以来、語学力向上や異文化理解を目的とする様々な語学イベントを学生主導で実施し、学生同士が学びあい、交流できる場を提供してきた。当初は英語ディスカッションイベントが中心だったが、2022 年 11 月にロシア語による会話イベントの開始を契機に、ドイツ語やスペイン語など、多言語イベントが次々とスタートした。今年度は、交換留学生の協力の下、ポーランド語や韓国語のイベントも開催した。本発表では、LINK 活動のうち多言語イベントに焦点を当て、個々のイベントの成立の経緯や活動内容、参加者の交流の様子を振り返る。特に、興味関心を同じくする者が集う場としての意義、学習意欲や理解度への影響などにも注目したい。活動を通じて得られた成果や成長実感についても報告する。また、今後、イベントを継続させていくための課題と努力についても触れる。	

グローバルコモンズ学生ボランティアスタッフ「LINK」実践報告
～多言語イベントを通じた学生の主体的な学び～

むすんで、うみだす。
京都産業大学

【発表者】
杉江 昌子 / ハフマン 美亜 / アンドレア・レイシー
京都産業大学 教育支援研究開発センター事務室 グローバルコモンズ学習支援担当

船山 凌雅 / 吉本 航基 / 河野 聖
外国語学部 ヨーロッパ言語学科 ロシア語専攻 4年

定期イベント

ロシア語で話そう！

【概要】
2022年秋学期にロシア人交換留学生の提案で開始したロシア語の会話イベント。2023年度以降は、ロシア語学科の学生が引き継いで主導している。

【内容】
ロシア人交換留学生とフリートークやボードゲーム、手作りのオリジナルかるたなどで楽しむ。また、初学者向けの勉強会も行う。

【対象】ロシア語学習者

【2024年度開催日時】
春学期 毎週月・金曜
秋学期 毎週月曜

【参加人数（延べ）】
206名（2024年度）

ドイツ語で話そう！

【概要】
「ロシア語で話そう！」に参加しているLINKから、ドイツ語でも同様のイベントを定期開催したいとの提案があり、2023年5月に開始した。

【内容】
ドイツ語母語話者の留学生を交えて会話やゲームを楽しむ。また、学習者同士でドイツ語の単語や表現の学習をする。

【対象】ドイツ語学習者、
ドイツ語に興味を持つ人

【2024年度 開催日時】
春・秋学期 毎週月曜

【参加人数（延べ）】
157名（2024年度）

その他の定期イベント

不定期イベント

不思議！言語の世界

【概要】
好きな言語について言語学的見地でプレゼンを行うイベント。言語好きの学生が集まって、2023年～2024年にかけて３回開催した。

【発表内容】
第1弾・英語とロシア語の繋がり
・トキポナ（人工言語）
第2弾・アヴェスター語
・ゲルマン語派入門
第3弾・比較言語学入門
・ロシア語の方言

ポーランド語で話そう！

【概要】
ポーランド人留学生とポーランド語で語り合うイベントを2024年11月に開催した。
会話を円滑に進めるための資料を自作した。

【内容】
・挨拶
・会話表現などの定型文
・単語と文法の学習
・ポーランド文化
・ポーランド料理

関西弁入門

2023年7月開催。
留学生や非関西圏の学生を対象に、関西弁ならではの発音や語尾変化、イントネーションについて解説。発音練習やクイズも行った。

韓国語で話そう！

2023年2回、2024年2回開催。
韓国人留学生を囲んで、韓国語で会話を楽しんだり、日本語で韓国文化（音楽・ドラマ・料理など）について語り合うイベント。

世界と話そう！

2023年と2024年12月に開催。
各言語の母語話者（留学生等）の協力で行う多言語交流イベント。様々なレベルの言語学習者と留学生たちが簡単なトピックの会話を楽しむ。

LINKが語る多言語学習について

言語学習プロフィール

船山 凌雅

【話せる言語】
日本語、ロシア語、英語
【少し話せる言語】
ドイツ語、ポーランド語、ブルガリア語、ウクライナ語
【学んでいる言語】
古教会スラヴ語、古ロシア語、ラテン語、ギリシア語、ヒッタイト語、フランス語、エスペラント語、etc...

河野 聖

【話せる言語】
日本語、ロシア語、英語
【少し話せる言語】
ポーランド語
【学んでいる言語】
セルビア語

吉本 航基

【話せる言語】
日本語、ロシア語、ドイツ語、英語
【少し話せる言語】
ポーランド語、クロアチア語、スウェーデン語
【学んでいる言語】
ラテン語、古典ギリシア語、フランス語、ゴート語、中高ドイツ語、etc...

なぜ多言語を学ぶのか

1.言語の役割
人間は言語を通じて思考し、言語は社会や共同体の中で共有される約束事として機能する。そして、人の心は母語によって形作られるため、言語は単なるコミュニケーション手段ではなく、その民族の価値観や世界観を映し出すものでもある。

2.多言語学習と異文化理解
他の言語を学ぶことは、その言語が使われる共同体の思考や価値観の基盤を知ることであり、言語がエスニシティと深く結びついていることを理解する機会となる。このような理解は、翻訳機だけでは決して到達できない領域であり、言語学習を通じて初めて得られるものである。

1.情報収集のツールとして
当外国語を用いて情報収集することで、生の声がわかる。

2.語学として
その言語の成り立ちやシステムなど、体系だった学習の楽しさを感じられる。

3.コミュニケーションツールとして
当外国語を使用することで、現地人へリスペクトを示せるとともに、コミュニケーションツールとして用いることができる。翻訳機では代替できないものである。

1.読書のために
ある言語の表現やレトリックを学ぶことで母語の語彙も豊かになり、母語でない言語でゆっくりと読むことは多くの発見がある。

2.異文化理解として
異なる言語を学ぶことで母語を相対化できるようになる。また学んだ言語を話す人に親しみが持てるようになる。

多言語学習のコツ

1.文字と発音をしっかり覚える
2.文法を疎かにしない
3.検定でレベルアップ

1.こまめな復習:説明できるまで！
2.学んだらすぐ演習:高頻度で！
3.苦手な範囲を把握:相談も！

1.無理して勉強しない
2.座学もやる
3.ネイティブを信用しすぎない

参加者の声

【ロシア語で話そうの参加者】
・日本語を学習しているロシア語母語話者と話すことによって知らなかった単語やフレーズを日本語で学習できる！
・気軽に参加しやすい
・ロシア語を話す機会が欲しくて参加しています
・自信とモチベーションを得ました

【ドイツ語で話そうの参加者】
・様々な交流ができ、今まで交流のなかった人と気兼ねなく集中して話せる
・学年を超えた交流が出来る
・留学生との交流が出来る
・雰囲気が好ましい
・ドイツ語学習者と交流し、自分の文化や文学について教えることができる（ドイツ人留学生）
・日本の学生と友達になり、ドイツ語学習者の課題を知れる（ドイツ人留学生）

活動の振り返り

【学び・気づき】
活動を通じて自ら考えて行動する主体性や企画力を養った。互いに協力し合い、切磋琢磨する仲間との縁が築けた。お互いに高め合うことができる居場所が学習の動機付けとなった。

【課題と展望】
新たな参加者を獲得し、継続的に開催していくために、イベント内容の選択など、いかに活動を充実させていくかが課題である。イベントを通じた経験や学びを後輩に伝えて、今後も応援していきたい。

発表に関する資料
↓ ↓ ↓

8. 京都外国語大学

テーマ	コラボレーションと幸福感を _____ と共に	
発表代表者	森　リンジー：京都外国語大学　外国語学部英米語学科　講師	
連名発表者	ガーニ・フィリップ：京都外国語大学　外国語学部英米語学科　講師	
キーワード	幸福・ウェルビーイング	集団効力感
	教育環境の制限	コラボレーション
発表の概要	この発表では、「協力の力」と「幸福感・ウェルビーイング」の関係について探る。本発表は、大学教職員のウェルビーイングの観点を調査した研究結果を基礎としている。これらの結果は、教師の視点が指導効果にどのような影響を与えるかについてのより広範な議論と結びついている。この議論では、「教育環境の問題」、「協力」、「幸福」の関係を検証し、今後の教育環境や教育方法の可能性を探る。個人の取り組み（ミクロレベル）、組織内の取り組み（メゾレベル）、大学レベルや社会全体の取り組み（マクロレベル）を提案することで、協力と幸福を高めるための実践的かつ理論的なアイデアを提示する。教官の幸福に焦点を当てたこれまでの研究成果に加え、学生、職員、大学、さらには地球規模での「幸福感・ウェルビーイング」へと話を広げていきます。	

Transforming Educational Spaces: Collective Efficacy, Planetary Well-being, and the Future of Learning

COLLABORATION AND WELL-BEING WITH _____

Lynsey Mori and Philip Gurney

Introduction

We investigated the well-being of English language instructors at our university, exploring their perceptions of well-being within the academic environment. /

大学における英語教師の福祉・ウェルビーイングを調査し、教育環境における福祉の認識を探りました。

Japanese University / 日本の大学

- Globalization pressures / グローバル化の圧力
- Challenges integrating foreign faculty / 外国人教員の統合における課題
- Institutional isolation / 組織的孤立

Language Teaching Environment / 言語教育環境

- Cultural isolation / 文化的孤立
- Overwork / 過重労働
- Test-driven pedagogy / テスト重視の教授法
- Lack of autonomy / 自律性の欠如
- Rigid educational structures / 硬直した教育構造

Context

Well-being Challenges / 福祉の課題

- Teacher burnout / 教師の燃え尽き症候群
- Limited collaboration / 協力の制限
- Hierarchical structures / 階層的構造
- Limited institutional support / 制限された制度的支援
- Contractual precarity / 契約上の不安定さ

SEL and Planetary Well-being / 社会的情動学習と地球全体の福祉

- Model to enhance emotional resilience / 感情的レジリエンスを高めるためのモデル
- Developing global responsibility / 地球規模の責任感の育成
- Well-being of self and nature / 自己と自然

Research

Research Questions

1. What does well-being mean to teachers in our teaching context?
2. How do teachers' conceptualizations of well-being align with SEL pursuits?
3. What is the viability of SEL for well-being among instructors in our teaching context?

Study

- **Outline:** Survey exploring perceptions of well-being among 13 English language instructors at our university
- **Framework**: Social Emotional Learning (SEL). SEL serves as a guiding framework for emotional resilience, collaboration, and community in educational settings.
- **Methods**: Mixed-methods research combining quantitative and qualitative data for a holistic understanding of faculty well-being

Freedman, J. M., Ghini, M., & Jensen, A. L. (2017, February 14). SEL Leadership Report v4. Six Seconds. https://www.6seconds.org/tools/leadership-report

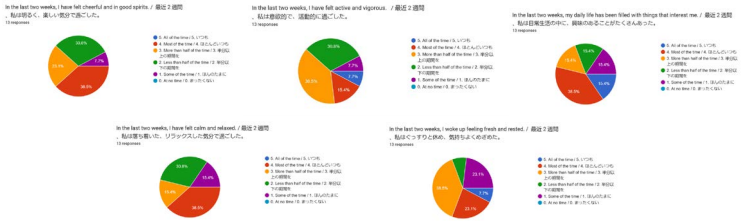
Survey Contents / アンケート内容

Background Information / 基本情報

- Age / 年齢
- University work experience / 大学で実務経験
- Position / 役職

WHO-5: Well-Being Index / ウェルビーイング アンケート

WHO５は，日常生活における気分状態を対象者本人に問う５つの質問項目（例：「最近２週間，あなたは，明るく，楽しい気分で過ごすことができましたか」）から構成される。



Open-Ended Questions / 自由回答形式のアンケート

1. Define well-being in your own words. / 自分の言葉でウェルビーイングとは ？
2. Do you maintain your well-being? If so, how? / あなた自身のウェルビーイングを維持していますか ？もしそうなら、どのように ？
3. Do you think/feel that your institutional workplace supports your well-being? If so, how? / あなたの職場は、あなたのウェルビーイングをサポートしていると思いま すか ？もしそうなら、どのように?
4. Do you support your students' well-being? If so, how? / あなたは履修生のウェルビーイングをサポートしていると思いますか ？もしそうなら、どのように ？
5. Based on your observations and experiences in other higher-education institutions and at KUFS, what do you think KUFS could do to better support your well-being as an instructor? (If you do not have anything to share, leave this blank.) 他の大学や KUFS でのあなたの観察・経験に基づき、KUFS は講師としてのあなたのウェルビ ーイングをより良くサポートするために何ができると思いますか ?(共有することが ない場合は、空欄のままにしてください。)

Results & Interpretation

SEL Analysis: Teacher's Perceptions / 講師のパースペクティブ・視点

- Teachers have a high degree of self-awareness regarding well-being (e.g., definition, practices, environment, etc.) / 自分の「ウェルビーイング」について、よく分かっています（例：意味・やり方・環境 など
- Teachers care about student well-being (e.g., have a clear desire to understand their students and build relationships with them) / 生徒の「ウェルビーイング」を大切にしています。（例：生徒をよく理解したい、人間関係を形成したい）
- Teachers feel university is unaware or indifferent to instructor well-being./ 大学が講師の「ウェルビーイング」に気づいていない、または関心がないと感じています。

Level / レベル	Implications for educators / 教育者への示唆	Classroom and personal examples / 教室と個人での実践例
Micro (Individual) / ミクロ（個人）	• Support personal well-being and emotional resilience / 個人の福祉と感情的レジリエンスを支援する • Practice SEL and recognize role in promoting planetary well-being / SEL を実践し、地球規模の福祉促進における自身の役割を認識する	• Practice reflective journaling / 振り返り日記をつける • Set clear work-life boundaries / 仕事と生活の明確な境界を設定する • Share personal eco-friendly habits / 自分の環境に優しい習慣を共有する
Meso (Institutional) / メソ（組織）	• Create a supportive and inclusive teaching environment / 支援的で包括的な教育環境を構築する • Bridge gaps in support networks / 支援ネットワークのギャップを埋める • Encourage cross cultural awareness and collaboration / 異文化理解と協力を促進する	• Facilitate team-building activities / チームビルディング活動を促進する • Use diverse materials / 多様な教材を使用する • Establish peer-support groups for teachers / 教師のためのピアサポートグループを設立する
Macro (Systemic) / マクロ（体系的）	• Promote global citizenship / グローバル市民意識を促進する • Advocate for equitable educational policies / 公平な教育政策を提唱する • Commit to long-term strategies to integrate self and collective well-being / 個人と集団の福祉を統合する長期的な戦略に取り組む	• Align curricula plans with global challenges such as inequality / カリキュラム計画を不平等などの世界的課題と調整する • Organize school projects / 学校プロジェクトを企画する • Support student collective initiatives focused on social impact / 社会的影響に焦点を当てた学生の集団的イニシアティブを支援する

Discussion Questions

For Educators: In what ways can our teaching practices promote responsibility for both personal and planetary well-being? / **教育者へ:** 私たちの教育実践は、個人と地球全体の福祉に対する責任感をどのように促進できるでしょうか？

For Students: How can your actions, both inside and outside the classroom, contribute to a healthier planet and community? / **学生へ:**教室の内外でのあなたの行動は、どのようにしてより健全な地球とコミュニティに貢献できるでしょうか？

9. 龍谷大学

テーマ	学生の文章力を支える！ 龍谷大学ライティングサポートセンターによる相談対応と学生スタッフの成長	
発表代表者	島村 健司：龍谷大学 ライティングサポートセンター ライティングスーパーバイザー	
連名発表者	岩間 智昭：龍谷大学 文学研究科 日本語日本文学専攻 博士後期課程 4年生 野間 颯 ：龍谷大学 文学研究科 日本語日本文学専攻 博士後期課程 2年生 笹原 有貴：龍谷大学 文学研究科 日本語日本文学専攻 博士後期課程 1年生	
キーワード	ライティングセンター	スチューデントジョブ
	ルーブリック	アカデミック・ライティング
発表の概要	龍谷大学ライティングサポートセンターでは、大学院生のライティングチューターが中心となり、龍谷大学生のレポートや卒業論文など文章作成にかんする相談を受けつけている。相談対応においては、答えを教えたり押しつけたりするのではなく、相談者の考えを尊重し、課題解決の方向性を一緒に探る姿勢を大切にしている。また、当センターでは、ライティングチューターに対するサポートとして、定期的な研修のほか、学期ごとに、ルーブリックを活用してチューターが自己評価を行い、自身のチューターとしての成長度や大学院生としての成長を可視化している。本ポスターセッションでは、学習支援の観点から相談対応にかんするデータを共有するとともに、スチューデントジョブの観点からチューター研修の具体的な取り組みとその成果について紹介する。	

You, Unlimited

学生の文章力を支える！ 龍谷大学ライティングサポートセンターによる 相談対応と学生スタッフの成長

＜発表者＞　島村 健司（代表：龍谷大学 ライティングサポートセンター ライティングスーパーバイザー）
岩間 智昭（龍谷大学 文学研究科 日本語日本文学専攻 博士後期課程 ４年生）
野間　颯（龍谷大学 文学研究科 日本語日本文学専攻 博士後期課程 ２年生）
笹原 有貴（龍谷大学 文学研究科 日本語日本文学専攻 博士後期課程 １年生）

RYUKOKU UNIVERSITY

ライティングサポートセンターの目的・理念・基本姿勢

目的
- 龍谷大学生のレポートや卒業論文などのライティングにまつわる事柄を支援すること。

理念
- 論理的に考える能力を養い、それにともなう表現の技術を高める。
- 読み書き能力の向上にとどまらず、分析力を高める。

基本姿勢
- 学生に考えさせる。（指導ではなく、アドバイス）
- アカデミックライティングの範疇で対応する。（各研究分野の専門的な内容に踏み込まない。）

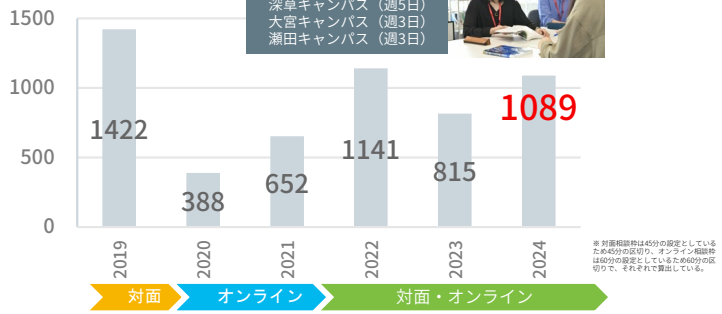
龍谷大学ライティング
サポートセンターについては
HPをご覧ください↓

キーワード
- ライティングセンター
- スチューデントジョブ
- ルーブリック
- アカデミックライティング

ライティングサポートセンター利用状況

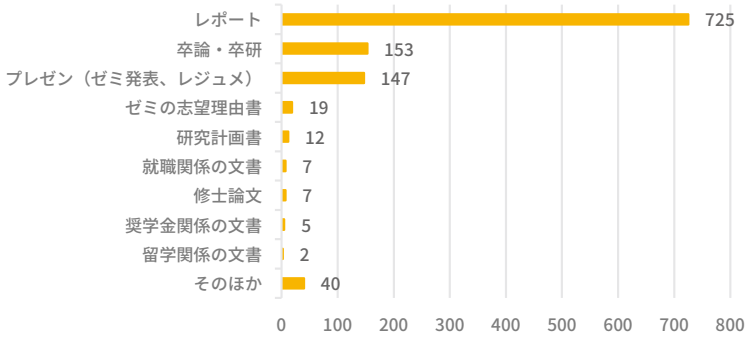
相談利用者数

授業実施期間中を中心に
各キャンパスで開室。
深草キャンパス（週5日）
大宮キャンパス（週3日）
瀬田キャンパス（週3日）



※対面相談枠は45分の設定としているため45分の区切り、オンライン相談枠は60分の設定としているため60分の区切りで、それぞれで算出している。

相談内容（2024年度の実績）



2024年度の相談者のアンケート回答（一部設問を抜粋）

10段階（10＜良＞～1＜悪＞）の回答をもとに平均評価を紹介します。（回答数　480件）

相談対応に満足した	自分の考えを引き出せた	相談対応のポイントが適切	説明が分かりやすい	1人ですすめていけそう
9.4	8.85	9.46	9.47	8.81

これらを支えてくれているのが龍谷大学の大学院生であるライティングチューター（26名　*うちチューター・リーダー10名）

ライティングチューター研修の取り組み

研修内容
- 採用時研修（業務説明、模擬の相談対応／ロールプレイング、アカデミックライティングの基礎講習）
- チューター・リーダー開室前研修
- 現場研修（基本業務、相談対応、英語対応、講習会・出張講習（チューター・リーダーが対象）　）　など

模擬の相談対応／ロールプレイングの様子

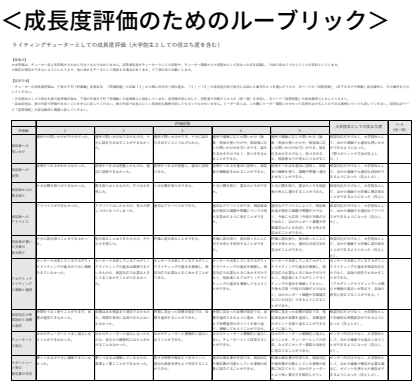
ライティングチューター成長度評価

目的

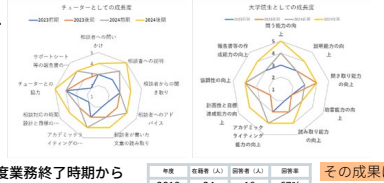
チューター（大学院生）
- チューターとしての成長をはかり、今後のチューター業務向上につなげること。
- チューター業務から大学院生として役立つ点を認識し、大学院生に必要とされる能力に生かすこと。

ライティングスーパーバイザー
- 評価結果のあり方・効果を把握すること
- 今後の効果的なあり方を検討すること。

＜成長度評価のためのルーブリック＞



sample



2019年度の年度業務終了時期から
各学期業務終了時期に実施
・チューターには協力として提出してもらっている。
・入力データは、個人名を出さない条件で、ほかの
　場面で活用することの了解を得ている。

年度	在籍者（人）	回答者（人）	回答率
2019	24	16	67%
2020	18	15	83%
2021	21	14	67%
2022	27	23	85%

その成果は…

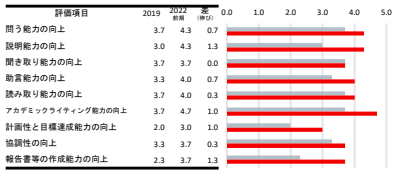
case1　＜6回の回答者＞
＜3名＞の平均（2019と2022前期の差）
2019時点
文学研究科博士過程2名
文学研究科修士過程1名
2022前期時点
文学研究科研究生2名
文学研究科博士過程1名

【チューターとしての成長度】

評価項目	2019	2022前期	差（伸び）
相談者への問いかけ	3.0	3.7	0.7
相談者への説明	3.0	4.0	1.0
相談者からの聞き取り	4.0	3.7	-0.3
相談者へのアドバイス	3.3	3.3	0.0
相談者が書いた文章の読み取り	3.3	3.7	0.3
アカデミックライティングの理解と適用	3.3	4.3	1.0
相談対応の時間設計と目標の達成	2.0	3.7	1.7
チューターとの協力	4.0	4.0	0.0
サポートシート等の報告書の作成	2.7	4.0	1.3

【大学院生としての役立ち度】

評価項目	2019	2022前期	差（伸び）
問う能力の向上	3.7	4.3	0.7
説明能力の向上	3.0	4.3	1.3
聞き取り能力の向上	3.7	3.7	0.0
助言能力の向上	3.3	4.0	0.7
読み取り能力の向上	3.7	4.0	0.3
アカデミックライティング能力の向上	3.7	4.7	1.0
計画性と目標達成能力の向上	2.0	3.0	1.0
協調性の向上	3.3	3.7	0.3
報告書等の作成能力の向上	2.3	3.7	1.3

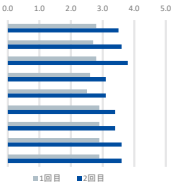


case2　＜2回の回答者＞
2回の回答者の平均と差
・2020前期～2022前期
＊2019は前期・後期の
　区分がないため除外
・初回の回答が前項の
　期間に該当する
　チューターのみ対象

研究科	課程	人数	合計
文学	修士	1	5
	博士	4	
法学	修士	1	1
国際学	修士	6	6
農学	修士	2	2
合計		14	14

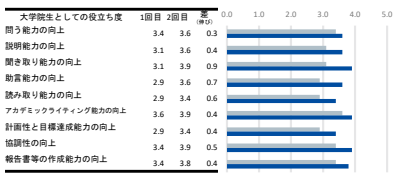
【チューターとしての成長度】

評価項目	1回目	2回目	差（伸び）
相談者への問いかけ	2.8	3.5	0.7
相談者への説明	2.7	3.6	0.9
相談者からの聞き取り	2.8	3.8	1.0
相談者へのアドバイス	2.6	3.1	0.5
相談者が書いた文章の読み取り	2.5	3.1	0.6
アカデミックライティングの理解と適用	2.9	3.4	0.5
相談対応の時間設計と目標の達成	2.9	3.4	0.6
チューターとの協力	2.9	3.6	0.7
サポートシート等の報告書の作成	2.9	3.6	0.8

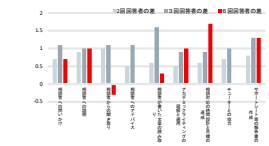


【大学院生としての役立ち度】

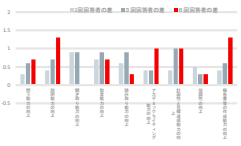
大学院生としての役立ち度	1回目	2回目	差（伸び）
問う能力の向上	3.4	3.6	0.3
説明能力の向上	3.1	3.6	0.4
聞き取り能力の向上	3.1	3.9	0.9
助言能力の向上	2.9	3.6	0.7
読み取り能力の向上	2.9	3.4	0.6
アカデミックライティング能力の向上	3.6	3.9	0.4
計画性と目標達成能力の向上	2.9	3.4	0.4
協調性の向上	3.4	3.9	0.5
報告書等の作成能力の向上	3.4	3.8	0.4



2・3・6回の回答者の差（伸び）比較
【チューターとしての成長度】



2・3・6回の回答者の差（伸び）比較
【大学院生としての役立ち度】



チューターとしての成長、大学院生としての成長が
- ライティングサポートセンターの相談の質向上
- チューターにとってはスチューデントジョブとして今後のキャリアに役立てる経験

につながっている。今後も、相談者、チューターの双方の成長となるよう、ライティングサポートセンターを運営していく。

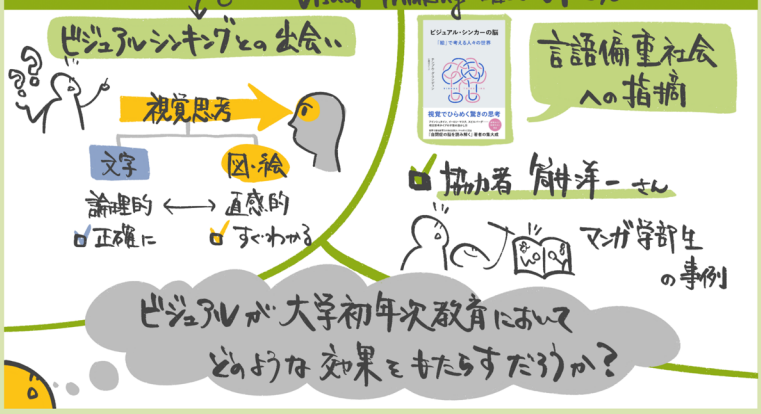
10.　大谷大学

テーマ	文字から視覚へ：学びを変えるビジュアル評価の可能性	
発表代表者	筒井　洋一：大谷大学　非常勤講師	
連名発表者	森崎　恭平：個人事業主	
キーワード	ビジュアルシンキング	認知の多様性
	ビジュアル評価	
発表の概要	本研究は、ビジュアルシンキングを大学教育に導入し、学生自身がビジュアルと文字のどちらで理解が深まるかを認識し、伝統的な文字表現を好むか、ビジュアルで表現することを好むかを知ることで、自分の学びの特徴を把握した。授業では、三角や四角などの基本形を使い、素早く絵としてアウトプットする方法を学んだり、ワークでビジュアルシンキングを実践し、学びを視覚的に表現しやすいかどうかを探った。これにより、認知の多様性を尊重し、学生の得意不得意に合わせた学びを可能にし、毎回の振りかえりシートにも文字だけでなく、ビジュアル表現も加味したことで、文字評価以外にもビジュアル評価の可能性について探求した。	

文字から視覚へ: 学びを変えるビジュアル評価の可能性

筒井洋一（大谷大学非常勤講師）、Jack 森崎恭平（個人事業主）

① 背景



② 目的

大学初年次教育における**学びの質向上**を目指し
言語偏重の現状に対し
ビジュアルを導入する意義と課題を明らかにする。

③ 研究方法

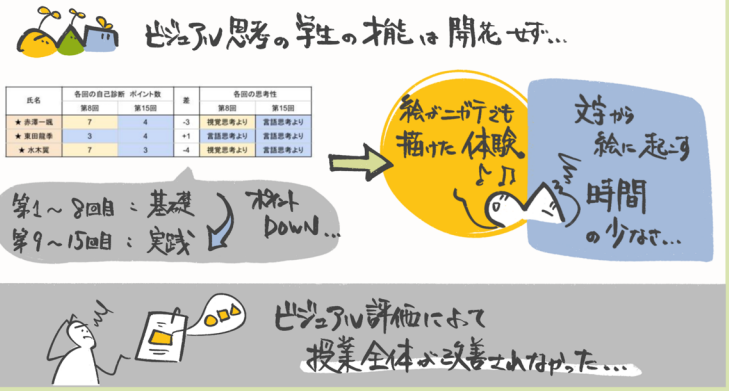
④ リフレクションシートと最終レポート

⑤ 自分診断シートと学生インタビュー

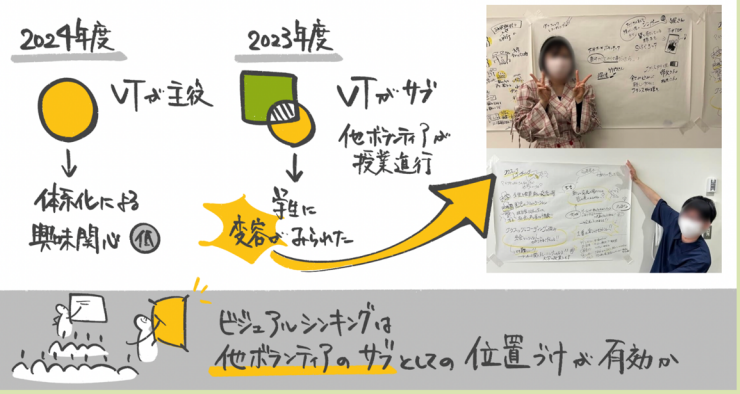
表1. シート提出した学生における
視覚思考と言語思考の移り変わり

氏名	各回の自己診断 ポイント数 第8回	第15回	差	各回の思考性 第8回	第15回
★ 赤澤一颯	7	4	-3	視覚思考より	言語思考より
石黒興大	3	3	0	言語思考より	言語思考より
金谷愛結実	3	3	0	言語思考より	言語思考より
北 遊心	7	3	-4	視覚思考より	言語思考より
駒柳朋也	1	1	0	言語思考より	言語思考より
佐々木暖介	2	4	+2	言語思考より	言語思考より
田中 尊成	5	1	-4	中間思考より	言語思考より
★ 東田陸帝	3	4	+1	言語思考より	言語思考より
大堂義継	4	4	0	言語思考より	言語思考より
藤島尽敬	4	1	-3	言語思考より	言語思考より
須屋 結夢	2	2	0	言語思考より	言語思考より
天野温	3	1	-2	言語思考より	言語思考より
★ 水木翼	7	3	-4	視覚思考より	言語思考より
小川桜理	3	3	0	言語思考より	言語思考より
辻井 聖也	3	3	0	言語思考より	言語思考より
加藤舜一	7	6	-1	視覚思考より	視覚思考より
河本紀香	6	8	+2	視覚思考より	視覚思考より
永崎楠	7	8	+1	視覚思考より	視覚思考より
飛田祐一	6	7	+1	視覚思考より	視覚思考より
中森義来	5	7	+2	中間思考より	視覚思考より
南日菜子	5	6	+1	中間思考より	視覚思考より
岡村幸拓	8	10	+2	視覚思考より	視覚思考より
細川興	8	5	-3	視覚思考より	中間思考より

⑥ 考察と課題 I　VT という授業において



⑦ 考察と課題 II　ボランティア授業において



⑧ まとめ

参考文献
テンプル・グランディン、中尾ゆかり訳 (2023)
『ビジュアル・シンカーの脳:「絵」で考える人々の世界』NHK出版

11.　京都華頂大学･華頂短期大学

<table>
<tr><td>テーマ</td><td colspan="2">大学生･短期大学生のメンタルヘルスおよびストレス対処の現況
―メンタルヘルスリテラシー教育の導入に向けて―</td></tr>
<tr><td>発表代表者</td><td colspan="2">渋谷　郁子：華頂短期大学　幼児教育学科　准教授／
京都華頂大学･華頂短期大学教育開発センター　主事</td></tr>
<tr><td>連名発表者</td><td colspan="2">上田　有里奈：京都華頂大学現代生活学部　准教授／
京都華頂大学･華頂短期大学教育開発センター　研究員
根岸　裕子　：京都華頂大学現代生活学部　教授／
京都華頂大学･華頂短期大学教育開発センター　研究員
渡邊　雄一　：京都華頂大学現代生活学部　准教授／
京都華頂大学･華頂短期大学教育開発センター　研究員</td></tr>
<tr><td rowspan="2">キーワード</td><td>メンタルヘルス</td><td>ストレス対処</td></tr>
<tr><td>メンタルヘルスリテラシー教育</td><td></td></tr>
<tr><td>発表の概要</td><td colspan="2">メンタルヘルスリテラシー教育の基礎資料を得るため、大学生･短大生 454 名を対象に、メンタルヘルス、ストレス対処、スマホ依存、睡眠時間、相談相手の有無に関するオンライン調査を実施した。その結果、メンタルヘルスは学科による違いが見られ、全体の約 10%の学生に気持ちの落ち込みが顕著であることが判明した。ストレス対処では、メンタルヘルスリスクが高い学生は「逃避と抑制」といったネガティブな対処を用いる傾向がみられた。睡眠に関しては、平日にはリスクが高い学生の睡眠時間が短いが、休日の差はなかった。相談先については、メンタルヘルスリスクが高い学生は相談先が限られる傾向があった。スマホ利用では、学校種や学科による差はなかったが、41.2%がスマホ依存の疑いがあり、メンタルヘルスリスクが高い群はその傾向が強いことが示唆された。これらの結果は、メンタルヘルスリテラシー教育の導入において重要な示唆を与えるものと考えられる。</td></tr>
</table>

大学生・短期大学生のメンタルヘルスおよびストレス対処の現況

―メンタルヘルスリテラシー教育の導入に向けて―

渋谷 郁子・上田 有里奈・根岸 裕子・渡邊 雄一
（京都華頂大学・華頂短期大学　教育開発センター）

背 景

■ 教育効果に大きな影響を与えるメンタルヘルス
・さまざまな精神疾患の好発期である青年期
・メンタルヘルスの状態が良くない学生では、入学後の基礎学力の低下が大きい（堀田ら, 2017）

■ 重要性を増す学生へのメンタルヘルスケア
コロナ禍の前後から、学生相談室を利用する学生が大幅に増加
→ 学生支援体制の強化が必要
→ 大学生活に即したメンタルヘルスリテラシー（=MHL）教育の開発・導入が必要

MHL＝精神疾患に関する認識や管理、予防するための援助についての知識や考え（Jorm et al., 1997）。今般の学習指導要領の改訂に伴い、小中高の学校教育では、心の健康や精神疾患に関する内容の充実が図られることとなった。

目 的

■ 本学学生のメンタルヘルスやストレス対処、およびメンタルヘルスに関連する諸要因についての基礎的データの収集・現況把握

方 法

■ 対象
・大学生326名、短期大学生278名
・うち回答者　大学生231名、短期大学生223名
（全体回答率 75.2%）

■ 手続き
2024年7月上旬から中旬にかけて、オンラインで質問紙調査を実施した。

■ 尺度
①K10尺度（K10）
②コーピング特性簡易尺度（BSCP）
③スマートフォン依存スケール短縮版（SAS-SV-J）
④平日・休日の睡眠時間
「5時間未満」「5～6時間」「6～7時間」「7～8時間」「8～9時間」「9～10時間」「10時間以上」から選択
⑤相談相手の有無・種類
「いない」「家族」「直接会うことのできる友人」「インターネット等を介してつながっている友人」「恋人」「大学・短大の先生」「小中高時代の先生や習い事の先生など」「その他」から選択（複数回答可）

■ 倫理的配慮
京都華頂大学の研究倫理審査委員会の承認を経た（No. 24002）。アンケート回答方法を無記名式とし、研究目的と調査参加の自由、データ公表時の匿名性の保障などを文面で説明し、回答の送信をもって調査に同意したものとみなした。

結 果

①K10尺度：全体平均は11.4点（範囲0-40点）。**全体の10%程度に顕著な気持ちの落ち込み**がみられた。

②BSCP：メンタルヘルス・低リスク群は、「気分転換」「積極的問題解決」「問題解決のための相談」「発想の転換」得点が、高リスク群、あるいは中リスク群より有意に高かった。一方、**「逃避と抑制」得点は、メンタルヘルス上のリスクが高い群ほど、有意に高かった**（図1）。

③SAS-SV-J：学校種・学科・回生による違いはなかったが、スマホ依存の疑いのある学生は**全体の40%程度**存在した。**スマホへの依存度は、メンタルヘルス上のリスクが高い群ほど、有意に強かった**。

④睡眠時間：平日よりも休日の睡眠時間が有意に長かった。**メンタルヘルス・高リスク群は低リスク群と比べ、平日の睡眠時間が有意に短かった**。

⑤相談相手の有無・種類：直接会うことのできる友人や家族に相談している学生が多かった。相談相手がいないと回答した者は全体の**6%程度**で、一回生が多い傾向にあった。また、**メンタルヘルス上のリスクが高い群ほど、相談先の種類が限られていた**（図2）。

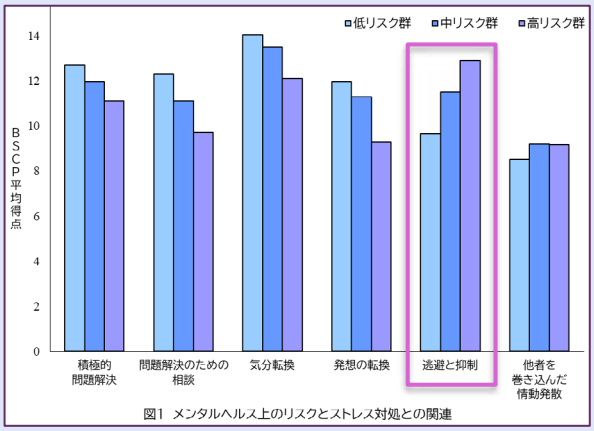


図1 メンタルヘルス上のリスクとストレス対処との関連

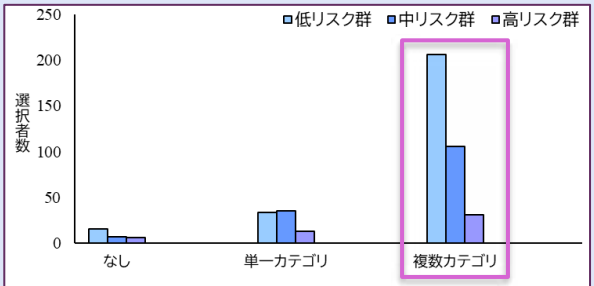


図2 メンタルヘルス上のリスクと相談相手の種類

考察：MHL教育の導入に向けて

■ 特に以下の4点について、学生の自覚を促す教育プログラムを開発し、メンタルヘルスの維持・向上を図る

- 「逃避と抑制」以外の健康的なストレス対処法の修得
- スマホ依存の軽減
- 平日における十分な睡眠時間の確保
- 複数の相談相手、相談先の確保

12.　龍谷大学

テーマ	学生の授業観察にもとづく授業改善	
発表代表者	寺川　史朗：龍谷大学　法学部　教授	
連名発表者		
キーワード	学生参画	授業改善
発表の概要	本学では、2021　年度・2022　年度に「学生による授業観察」プロジェクトを実施し、その成果を基に 2023 年度から「学生による授業観察に基づく授業支援」を全学で推進している。2024 年度はこの取り組みの 2 年目となる。 観察を実施する学生は以下の通り事前研修の機会がある。 1 回目：授業観察の目的や手段、シラバスの読み方などを学ぶ。 2 回目：授業観察のポイントを検討し、学生が自身の経験に基づいて観察ポイントを提案する。 3 回目：実際に授業を観察し、報告書をまとめる。 なお、3　回目の研修で作成した報告書は、研修を担当する教員からフィードバックがあり、観察を希望した教員に意図が伝わる表現方法などを学んでいる。今後も教員がこの事業を利用し、学生の視点に基づく授業改善を進めていく予定である。	

学生の授業観察にもとづく授業改善

発表代表者　寺川 史朗　法学部・教授

研究概要

学修者本位の教育が求められるなか、学生の視点に立った授業改善を進める一環として、学生による授業観察制度を整備し実践する。
「龍谷大学基本構想400」では、「学生一人ひとりの学びへの思いや考えを取り入れて学修者本位の学びへと転換」すること、ならびに、「学生の参画を得て、教学改革を促進する組織文化を醸成する仕組みを検討する」ことが謳われている。
この取り組みは、学生の参画を得て、学修者本位の学びへと転換するような授業改善を進めるところに目的があり、全学的に教育力の向上を図ることが期待される。

研究内容

年間スケジュールは次の通りである。

【前期】
①授業観察学生の募集と説明会の開催
②事前研修の実施
・観察対象の授業のシラバスを読み到達目標や講義方法を確認する
・授業観察のポイントを考える
・授業観察の練習の対象となる教員と事前の打ち合わせをする
どのような点を特に観察してほしいかなど希望を聞く
授業の特徴やねらいを確認する
・授業観察報告書作成の練習をする
③授業観察を希望する教員の募集開始

【後期】
④学生と教員の事前打ち合わせ
・どのような点を特に観察してほしいかなど希望を聞く
・授業の特徴やねらいを確認する
⑤学生による授業観察
⑥授業観察報告書の作成と教員への提出
⑦事後研修（ふりかえり）

なかでも、②と⑥が重要であるため、その２点に絞って紹介する。

②事前研修の実施
事前研修を前期のうちに３回実施する。１回目の研修では、シラバスの実物を見ながら観察対象となる授業のようすを探り、担当教員との事前打合せの素材を発見する。また、講義概要には教員からのメッセージが込められていること、学生の側から見た到達目標には教員が学生に何を求めているかが書かれていること、シラバス中の複数のキーワードに着目すると教員が何を重視しているかが分かること、などを理解する。

【授業観察のようす・2022年度】

２回目の研修では、授業観察のポイントについて検討する。取り組みは2021年度から検討が開始され、2022年度に試行的に実施し、2023年度から本格実施しているため、授業観察のポイントは若干の蓄積がある。しかしながら、授業観察学生には、毎年ゼロから授業観察のポイントを考えてもらっている。全員が集まる研修のうち最も盛り上がるのはこの２回目の研修である。授業観察学生にはそれぞれ履修してきた多くの授業があり、どの授業が興味関心を呼び起こすものだったか、どの教員が受講生を飽きさせない工夫をしていたかなどについて自由に意見交換と情報交流をしている。３回目の研修では、授業観察のポイントをまとめた一覧表を参考に、実際に授業を観察し、報告書を作成・提出する。研修中の報告書については、授業観察学生に自由な発想にもとづいて作成するよう指示している。イラストや絵、４コマ漫画、曼荼羅のようなデザイン、マトリックスなど自由な発想に期待しているが、今のところ斬新な報告書が作成されたことはなく、もっぱらテキスト形式の報告書が作成されている。

⑥報告書の作成と教員への提出
前期の後半あたりから授業観察を受けたいと希望する教員を募り、授業観察学生は応募した教員の授業を実際に観察する。対象授業の時間割に合う（マッチング）学生が担当する。これまでは１つの授業につき１名の学生が観察してきた。マッチングしだいでは複数名の学生が１つの授業を観察してもよいと思われる。上記の研修中に作成された報告書は本取り組みの責任者が点検したうえで加筆・修正などして返却しているが、本番の授業観察では、学生が作成した報告書がそのまま授業担当教員に渡され、本取り組みの責任者は点検しないこととしている。

研究成果

この制度は利用した教員の授業改善に資することを目的としており、学生が作成した授業観察報告書をどのように活用、反映するかは、次年度に向けての授業準備や実際の授業運営のなかで行われるものと期待される。2024年度は２件の授業観察が実施され、いずれも大学院生が授業を観察した。事後研修（ふりかえり）において、当該大学院生が実際に観察したときのようすや報告書への記載内容を紹介し、観察を担当しなかった学生への情報提供と共有が行われた。報告書には、おもに授業の方法について、良かった点、改善が必要とされる点、今後の期待などが記載されている。これらはいずれも学生の視点に立ったものであることを必須とし、授業観察を受けた教員からはおおむね好評を得ている。授業観察学生からは、シラバスの読み方が分かるようになり授業に臨む姿勢が変わったとする声や、また、単位取得を意識せず授業を観察したためこれからの人生の指針となるような話を聞くことができたとする声が寄せられた。学生たちと検討した授業観のポイントの一覧表は次の通りである。

基本的な動き	話す	話す速さが適度である
	書く	板書が整理されている。
		チョークの色使いに統一感があるなど工夫されている（小中高校では実践している先生が多い。大学ではあまりいない）
	見る	教員の視線がおおむね受講生に行き渡っている
	動く	教員の動線が均等である。１か所にかたよっていない
教材の使い方	教科書	教科書の使い方が授業内容を理解するのに役立っている
	レジュメ	レジュメの分量が適度である（授業内容全てを書き込んでいるレジュメなら読めば済む。少なすぎる分量だとノートをとるのに精一杯になる）*6
		レジュメの使い方が授業内容を理解するのに役立っている
		レジュメが教科書と関連づけられている
		プレゼンテーションソフトの使い方が授業内容を理解するのに役立っている
授業の方法	授業形態	双方向、対話形式の授業になっている（大人数では難しいが40～50名程度までであれば可能）
	視聴覚教材	映像や画像など視聴覚教材を適度に用いている（90分全部映像だとしんどい。適量がよい）*5
	実物の提示	授業に関係する実物を提示する*1
授業の進行	授業時間	授業時間の使い方が工夫されている（短い休けいを入れることもあり得る）*4
	受講生の反応	受講生の反応を見ながら授業を進行している（90分集中するのは難しい。退屈そうにしてれば話題を変えて関心を呼び起こしたり、気分転換したりする）*7
授業の内容	興味関心	授業の中で受講生が興味関心を持つような問いを提示している（授業開始時に問いを示すことでその答えを考えながら集中して聞くことができる）
		研究や調査のテーマを受講生が自由に選べるようにしている（おもに実習や演習の授業で）
	参加意識	授業の中でresponのアンケートやクリッカーを使い結果を受講生に見せている（他の受講生がどのように考えているかが分かる）
課題や試験	課題提示	授業の中で課題を提示している
	応答	授業の中で提出された課題やコメント、質問に対し応答、フィードバックをしている（受講生は俄然ヤル気が起こる）*2
	試験説明	授業の中で試験内容や範囲について説明している（試験直前ではなく、毎回説明してくれるとその回のポイントが分かるし試験勉強にも役立つ）
		授業の中で試験における解答の仕方やヒントを提示している（試験で解答する際どのように書けばよいかが分かる）
LMSの使い方	課題提示	manaba course などを使って課題を出している
	補助教材	manaba course などで授業の補助教材や自己学習のための資料を提示している（専門分野でない学生にとって役立つ）
授業全体	雰囲気	質問しやすい、話しやすい雰囲気をつくっている*3
	到達目標	各回の授業においてシラバス記載の到達目標を達成できるような進行や構成になっている

*1 実物提示の例教室に植物を持ってきて受講生に見せる
教室での授業を少し早めに終えキャンパスに生えている植物を見に連れていく ＋説明付き
*2 フィードバックの例（学生）Respon に授業の感想や自分の考え、意見を書いて提出する
（教員）次回の授業で取り上げてコメントする
（学生）コメントを提出する → （教員）次回の授業で使うレジュメにコメントを載せてコメントするいき引き込まれた
*3 授業の雰囲気第１回授業時に質問しやすい雰囲気や話しやすい（含：教員に話しかけやすい）雰囲気をつくってくれると授業に出るのが楽しくなる
*4 45分→小休憩→45分を実践している教員もいる
*5 ２コマ連続の授業において、1講時はプレゼンテーションソフトを用いた授業で最後にレポート提出、2講時に関連する映像を見てレポート提出という実践例がある
*6 たとえば現地や現物の写真を見せる必要性がある授業では、写真掲載の関係でレジュメの分量が多くなってもやむを得ない
*7 授業の導入部で話していることがいつのまにか授業の核心につながっていき引き込まれた

今後の課題

課題はおもに次の２点である。

1　授業観察制度を利用する教員がきわめて少ない
授業改善につなげたいと考えている教員が自発的にこの制度を利用するものとし、制度を運営する側が教員に対し授業観察を受けるよう強要したり、義務づけたりしてはならないこととしている。そのため、この制度を利用する教員は年間2～3名程度で推移し、研修に協力してもらっている教員数を含めても年間5～6名程度である。そのため、研修期間中の授業観察を除けば、実際に授業観察をする学生は数名にとどまっている。教員には強要・義務づけをしないようにしながら利用を希望する教員数を増やしていくための妙案がなかなか浮かんでこないという課題がある。

2　授業観察制度を利用すべき教員が利用していないと考えられる
授業観察制度をこれまで利用した教員は、学生による観察にもとづく改善提案を必要としない教員であるように感じられる。つまり、ほんとうに改善しなければならない教員は、この制度を利用しない。そのような教員に対しどのように働きかけてこの制度を利用してもらうかも今後の課題である。

13.　京都産業大学

テーマ	拡がる！学生ファシリテータの活動 ～集まる多様なモチベーション～	
発表代表者	大島　和美：京都産業大学　教育支援研究開発センター事務室（F工房）職員	
連名発表者	高丸　奏太：京都産業大学　経営学部　2年次 今村　湧亮：京都産業大学　法学部　　2年次 大吉　桃花：京都産業大学　経済学部　1年次	
キーワード	学生ファシリテータ	多様なモチベーション
	活動の場の拡がり	ボランティア
発表の概要	学生ファシリテータ（以下、学ファシ）とは、初年次向けの授業を中心にグループワークの円滑な進行をサポートするボランティアの学生スタッフである。アイスブレイクの進行や受講生同士の話し合いのサポートを通して学生の主体的な学びを支援している。 　学ファシの活動には必須参加の活動と任意参加の活動があるが、任意参加の活動の幅が拡がっている。学内の授業支援や中学校の校外学習に協力するなど学内外から依頼を受けて活動することに加え、他大学の学生スタッフとのワークショップや学園祭での出展など学ファシが自ら活動の場をつくることも増えた。しかしこれらの任意の活動は人によって参加頻度に差が生まれている。そこで私たちは、学ファシの活動へのモチベーションや抱く想いは一様ではなく多種多様なのではないかと考え、調査を行い考察した。	

拡がる！学生ファシリテータの活動
～集まる多様なモチベーション～

[学生ファシリテータ]京都産業大学　法学部：今村湧亮（2年次）
経済学部：大吉桃花（1年次）
[教育支援研究開発センター事務室F工房職員]大島 和美

はじめに

学生ファシリテータ（以下、学ファシ）とは、初年次向けの授業を中心にグループワークの円滑な進行をサポートするボランティアの学生スタッフである。アイスブレイクの進行や受講生同士の話し合いのサポートを通して学生の主体的な学びを支援している。

学ファシの活動には必須参加の活動と任意参加の活動があるが、任意参加の活動の幅が拡がっている。学内の授業支援や中学校の校外学習に協力するなど学内外から依頼を受けて活動することに加え、他大学の学生スタッフとのワークショップや学園祭での出展など学ファシが自ら活動の場をつくることも増えた。しかしこれらの任意の活動は人によって参加頻度に差が生まれている。そこで私たちは、学ファシの活動へのモチベーションや抱く想いは一様ではなく多種多様なのではないかと考え、任意参加の活動率などを基に調査を行い考察した。※第15期学ファシ活動者数：82名（2025年2月現在）

調査概要

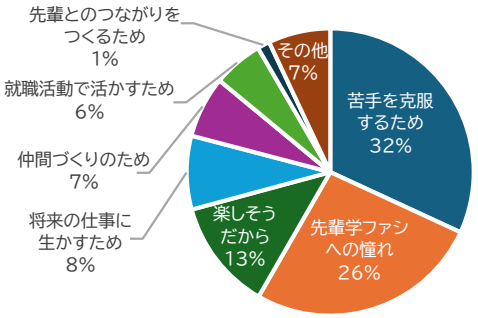
期　間：2024年12月21日から2025年1月29日
方　法：① Googleフォームを用いたアンケート調査
　　② インタビュー調査
対象者：第15期学生ファシリテータ82名
　　（1年次41名、2年次23名、3年次18名）
回答者：① 対象者のうち72名
　　② ①の回答者のうち5名

【アンケート調査の質問項目】
Q1.学ファシになった理由としてもっとも大きいものは？
Q2.新規学ファシ、継続学ファシどちらですか？
Q3.これまでに参加したことのある任意活動は何ですか？

【インタビュー調査の質問項目】
Q1.モチベーションはどうやって維持していますか？
Q2.任意活動に参加した理由は？
Q3.任意活動に参加しなかった理由は？
Q4.F工房に来るためのモチベーションを上げるには
　どうしたらいいと思いますか？
Q5.学ファシ活動で何を得たいですか？

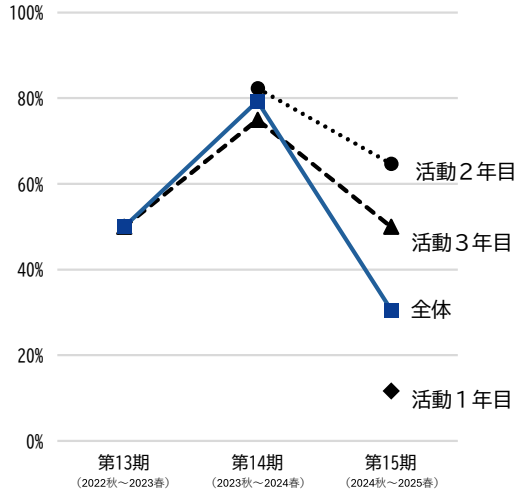
アンケート結果

【Q1.学ファシになった理由としてもっとも大きいものは？】



＜その他の回答＞
・いろいろな力を付けられると思ったし、つながりをつくるため
・もっと面白い授業ができると思ったから
・先輩学ファシへの憧れもあったが、FDに興味があったから
・大学の講義に関われる機会なんてないと思ったから
・友人の紹介

【Q3.から分かる任意活動の参加率】



【備考】

第13期～第15期に実施した任意活動への参加経験について、第15期の活動者が遡って回答した。活動年数ごとに、1回でも任意活動に参加したことのある人をカウントして参加率を求めた。

＜任意活動の傾向について＞
・第15期は、2024年9月から活動開始したため、12月時点では任意参加の活動の機会自体が少ない。

＜回答者の傾向について＞
・第14,13期は一部の人（第15期まで継続している人）のみを対象としているため、本来の第14, 13期の学ファシ全員とは異なる。
・活動3年目の人は、活動年数が長い分、活動へのモチベーションが高いことが予想される。

インタビュー結果

第15期学ファシ全体の傾向を大まかに把握するための予備調査として、アンケート調査を実施した。さらに、一人ひとりがどのようなモチベーションや想いを持って活動しているかを知るため、活動年数や任意参加の活動への参加率の異なる5名を選出し、インタビュー調査を行った。インタビュー調査では、学ファシの活動拠点である「F工房」への来室がモチベーションのカギになるのではないかと考え、学ファシ全体の来室頻度を高める工夫についての質問も取り入れた。

Q1.モチベーションはどうやって維持していますか？
・仲間が居ればできる安心感（活動2年目）
　→学ファシ活動で身近にいる仲間の存在
・新しい学びや成長を感じられる（活動3年目）
　→研修内容が毎年異なり新しい内容を異なるメンバーで学べる
　→自分に返ってくる学びを得ることができる

Q2.任意活動に参加した理由は？
・研修に参加できなかったため実践的なスキルを向上したい（活動2年目）
・いろんな人と話すチャンスが欲しい（活動1年目）
・初年次向けの授業以外の活動を学ファシと創るのが楽しい（活動3年目）

Q3.任意活動に参加しなかった理由は？
・ふらっと参加できる企画には参加したいと思っているが学ファシに友達がいなくて参加しにくい（活動3年目）

Q4.F工房に来るためのモチベーションを上げるには、どうしたらいいと思いますか？
・来室頻度を上げて他の学ファシとコミュニケーションを取る（活動3年目）
・ふらっと参加できる軽い企画があると良い（活動3年目）
・同期・同学部で話せる時間・イベントをしたい（活動1年目）

Q5.学ファシ活動で何を得たいですか？
・人の相性に合った話し方を学んで活かす（活動1年目）
・新しいものより今まで得たものを伸ばす（活動3年目）
・みんなと協働して何かを創り上げたい（活動3年目）
・課題解決能力を身に付けたい（活動2年目）
・これからの人生で必要な事を学びたい（活動3年目）

まとめと考察

まとめと考察

・アンケート調査から学ファシ活動への参加動機は「先輩学ファシへの憧れ」や「苦手を克服するため」など様々で、任意活動の参加率も様々だということが読み取れる。
・インタビュー調査では、学ファシ活動は授業では得難い学びを得ていることや、人とのつながりを重要視している人が多い、ということが読み取れる。
・インタビュー調査の結果、気軽に立ち寄れる場所を創り、人とのつながりを促進することで、組織の安心感が増し、学ファシのモチベーション向上が期待できることが読み取れる。
・これらの調査結果から「自分が成長できる学びを得ること」や「誰とでも話し合える仲間の存在」が学ファシ活動のモチベーション維持に繋がっていることが読み取れた。そして、学ファシ活動は学ファシにとって任意活動の参加率を問わず、様々な学びや成長をもたらす機会になっていると考察した。

14. 京都ノートルダム女子大学

テーマ	メタバースを駆使した学外連携および教育連携の実践紹介 ～メタバースサークルの 2 年間のあゆみより	
発表代表者	濱中　倫秀：京都ノートルダム女子大学　社会情報課程　准教授	
連名発表者	渡邉　詞水　：京都ノートルダム女子大学　現代人間学部　生活環境学科4年次生 昌子　綾花　：京都ノートルダム女子大学　現代人間学部　心理学科3年次生 尾崎　日沙乃：京都ノートルダム女子大学　社会情報課程　2年次生 小山　うらら　：京都ノートルダム女子大学　社会情報課程　2年次生	
キーワード	メタバース	出前授業
	高大教育連携	VR
発表の概要	web3.0 の時代を見据え、メタバースの活用が様々なシーンで見られるようになっている。従来のオンラインコミュニケーションツールとの違いは、アバターと呼ばれる自分の分身が仮想空間内で様々なコミュニケーションをする点にある。今回の発表では、メタバースサークルが取り組んだ学外との連携事例を紹介する。1つは医療系の学会（年次集会）の広報にメタバースを活用するサポートを行った。もう1つは高校への出前授業にメタバースをはじめとする XR 技術の体験を盛り込んだ。上記の結果と今後の可能性を考察する。	

メタバースを駆使した学外連携および教育連携の実践紹介

-メタバースサークル2年間のあゆみより-

濱中 倫秀　京都ノートルダム女子大学 社会情報課程 准教授
渡邉 詞水　現代人間学部生活環境学科４年次生
昌子 綾花　現代人間学部心理学科３年次生
尾崎 日沙乃・小山 うらら　社会情報課程２年次生

MAGIE ESPOIR

Introduction｜2023年3月　サークル結成

入試広報の後方支援を掲げてスタート

立ち上げ早々に、メタバース企業からの協力・指導を得て学内メタバースイベントを企画運営。しかし知識・スキルいずれも低くいずれも失敗・不発。

そんな中、2023年3月の「**SynergyLinkKyoto**」に出展。
失敗事例しかない状態だったが、たくさんのご縁が生まれ、
一気にネットワークが広がる。それに伴い、サークルの存在意義を再設定。

☞100人を超える方々・企業とネットワークが出来た

Work 1｜第34回日本外来小児科学会年次集会高松大会

メタバース広報を担当

2025年度の高松大会に向け、大会会頭や事務局長インタビューに加えて高松の観光やグルメ紹介動画を大学生視点で発信。
動画を通じて参加動機を形成し、年次集会への来場者増を目指す。

グルメ紹介動画制作にあたり、お店の選定・撮影交渉のすべてを学生が担当。

2024年の高山大会にも足を運び、メタバース空間体験ブースをPR。
メタバース空間内を実際に動き回るという体験を多くの方にしていただいた。
中にはその場で空間内への広告出展を申し込んでくださる企業も。

高松大会ウェブサイト　メタバース空間内

メタバース体験　企業ブースへのPR訪問

←メタバース空間はこちら

Work 2｜2024年11月　高校への出前授業①

京都府立大江高等学校

発足当時より3度にわたって出前授業を実施。2024年11月11日には、VRやメタバースをはじめとするXR（クロスリアリティ）技術を使った地域創生を考える授業を、学生主体で担当。

実際に使用したスライド

Work 3｜2024年12月　高校への出前授業②

神田女学園中学校高等学校

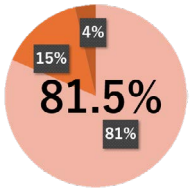
連携協定を結んでいる神田女学園中学校高等学校にて、
学生主体で企画・提案した特別授業を2024年12月に実施。
京都の連携校が授業をするのは初で、高校生の皆さんにも好評を博した。

エアラインプログラム

VRゴーグル体験

視野拡大・興味関心の喚起を目的とした４つの授業・ワークショップ。

①VRゴーグル体験
→VRで非現実を体験しよう。
②マインドマップ
→マインドマップで自分の興味を発見。
③エアラインプログラム
→相手目線のホスピタリティを学ぼう。
④探究学習サポート
→探究学習を大学生がサポート。



参加満足度

☞現在も複数の出前授業の準備中

京都/京都府立大江高等学校
大阪/英風高等学校・大阪信愛学院高等学校
長野/松本秀峰中等教育学校　ほか

＊ご不明点はお気軽にお問い合わせください。

MAGIE ESPOIR

第30回FD・SDフォーラム ポスターセッション　2025年3月1日@龍谷大学 ポスター制作：馬場万鈴　社会情報課程２年次生

15. 龍谷大学

テーマ	自主的 SD「龍谷未来塾 2024」の活動を通じた事務職員の資質向上に向けた取り組み	
発表代表者	岡田 雄介：龍谷大学 入試部／高大連携推進室 事務部長	
連名発表者	阿部 法子：龍谷大学 政策学部教務課 課長 甲斐 聡：龍谷大学 キャリアセンター（深草） 課長 河合 茂樹：龍谷大学 入試部 課長 杉山 聖子：龍谷大学 心理学部教務課 課長 鈴木 隆文：龍谷大学 瀬田キャンパス推進室 課長 谷口 清朗：龍谷大学 先端理工学部教務課 課長 原田 正誓：龍谷大学 REC 事務部（京都） 課長 奥 昌浩：龍谷大学 学長室（広報） 木村 友貴：龍谷大学 学長室（広報） 進藤 弘樹：龍谷大学 学長室（企画推進） 曽田 源 ：龍谷大学 入試部 長屋 綾乃：龍谷大学 瀬田キャンパス推進室 野村 大慈：龍谷大学 入試部 野村 珠美：龍谷大学 総務部 総務課 森本 彩花：龍谷大学 学生部（深草）	
キーワード	私たちはどう生きるか？	高等教育の展望
	次世代への継承（フューチャー・デザイン）	大学職員のこれから
発表の概要	今、高等教育は少子化の進行を背景に、未曾有の危機を迎えている。過去の経験則で未来を見通すこともできない。今後、多くの大学が学生募集停止や廃止に直面する「大学淘汰の時代」が現実となった。しかし、学内において、一人ひとりの構成員は不安を覚えつつも、我が事に落とし込むに至っていないのが現実であった。こうした状況を踏まえ、①外部環境の変化を正しく理解し学内外へ啓発すること、②今後、厳しい時代を生きる若い世代を育成すること、この二点を目的に事務職員共同研修企画「龍谷未来塾」を立ち上げ、「危機を正しく認識し、私たちはどう生きるか？」という共通テーマの下、「高等教育の危機」と「大学改革の要諦」について、4 つの視点から考察すべく、学内外への SD 公開講演研修会を開催した。 延べ 1,100 名を超える参加者を集め、時宜を得たテーマとして多くの耳目を集めたが、自主的 SD 活動「龍谷未来塾」の成果と課題について、広く共有したい。	

You, Unlimited

RYUKOKU UNIVERSITY

自主的SD「龍谷未来塾2024」

事務職員の資質向上に向けた取り組み

メンバー：岡田 雄介（座長）　阿部 法子　甲斐 聡　河合 茂樹　杉山 聖子　鈴木 隆文　谷口 清朗　原田 正誓
奥 昌浩　木村 友貴　進藤 弘樹　曽田 源　長屋 綾乃　野村 珠美　野村 大慈　森本 彩花

1．研修の目的・概要（研修活動期間：2024年9月下旬～2025年3月下旬）

①高等教育は少子化の進行を背景に、未曾有の危機を迎えている
②今後、多くの大学が学生募集停止や廃止に直面する「大学淘汰の時代」
③事務職員共同研修企画「龍谷未来塾」を立ち上げた
④外部環境の変化を正しく理解し、学内外へ啓発
⑤厳しい時代を生きる若い世代を育成する

「危機を正しく認識し、私たちはどう生きるか？」 というテーマのもと、多様な視点から考察すべく、学内外への**公開講演会**を開催

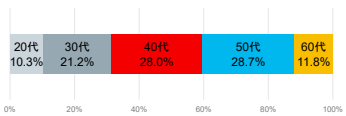
第1回 10/25	行政（文部科学省（事務局））から捉えた視点 高見 英樹 氏（文部科学省高等教育企画官／高等教育企画課高等教育政策室長）	文部科学省に訊く、中央教育審議会における審議の本質
第2回 11/15	高等教育の在り方に関する特別部会の視点 小林 浩 氏（リクルート進学総研所長／リクルート「カレッジマネジメント」編集長） パネリスト：安藤 徹 氏（龍谷大学副学長／文学部教授）　石原 正樹 氏（龍谷大学総務局長）	教職協働の実質化と大学職員への期待・課題
第3回 11/26	大学分科会の視点 村田 治 氏（関西学院大学名誉教授/前関西学院大学学長/中央教育審議会大学分科会副分科会長）	私立大学をとりまく環境と大学職員の役割
第4回 12/20	政策立案に関わる事務職員の視点 笠原 喜明 氏（東洋大学理事・事務局長）　福田 聡 氏（関西大学総務局長）	豊富な職員経験談から考える大学職員像の展望

2．講演会の実施結果 - 各講演会終了後のアンケート結果から -

申込者数：**1,110人**（参加者数804人）

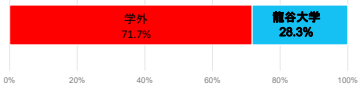
参加者からの声
大学の置かれる環境が厳しくなる時代に、「知の総和」の維持・向上を目指さなければならない、というお話には、身の引き締まる思いがしました。また、他大学の若手職員が積極的に質問される姿に刺激を受けました。

＜年齢＞



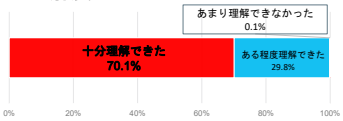
幅広い年齢層からの参加。
20・30代の参加者も多く、
厳しい時代を生きる若い世代の学びの動機付けにつながっている。

＜所属＞



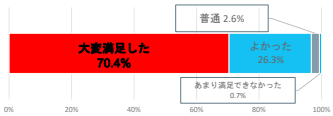
学外参加が7割を超え、社会的な注目も高い。学内外への啓発の一助となっている。

＜理解度＞



ほとんどの参加者は理解できたと回答しており、講師が説明した外部環境の変化（危機）を正しく認識している。

＜満足度＞



96.7%が満足と回答。
「どう生きるべきか」を考える一助となったと思料する。

3．本学の若手職員にどういう影響を与えたか - 全講演会終了後（1ヶ月後）のアンケート結果から -

講演会を通して、日本社会や高等教育を取り巻く環境の激変とともに、大学構成員として求められる資質に「学び続ける重要性」が述べられた。このことからアンケートを実施。

【目　　的】①学びの意欲・習慣に変化（行動変容）が生じたのか
②学びの実態（学習の取組、学習時間）　について調査

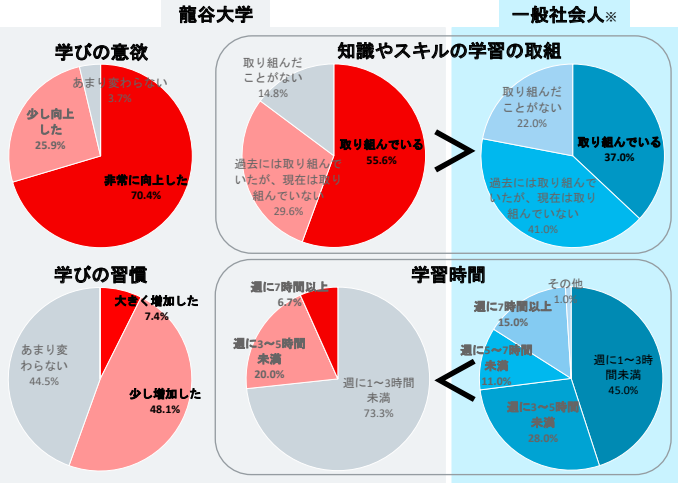
【調査概要】
対象：入職1～10年目の龍谷大学専任事務職員63名うち有効回答数40名
実施期間：2025年1月24日～1月31日

【調査結果】※以下の結果およびグラフは有効回答数40名のうち、講演会参加者27名の回答から作成
◆学びの意欲が「非常に向上した」「少し向上した」人は96.3%

◆学びの習慣（学習時間や頻度）が
「大きく増加した」「少し増加した」55.5%　「あまり変わらない」44.5%
学びの習慣が変わってない理由：「日々の業務に追われ時間を取れない」

◆働く姿勢が変わった例：危機感を認識した、当事者意識・主体性の向上
文科省のウェブセミナーを視聴し、高等教育の動きを注視
変わらなかった例：行動に移せていない、与えられた仕事に精一杯で時間が足りない

◆講演会参加者の学習意欲や習慣に向上が見られた一方、
学習時間は一般社会人と比べて低調（全体のうち「週1～3時間未満」の割合が1.6倍）



※引用：第102回『社会人の学習習慣』について（エンジャパン）

4．まとめ - 当事者意識の醸成と学びを深める関係性を通した「事務職員」から「大学職員」への覚醒 -

◆社会や高等教育の環境変化のなかで、事務職員の役割は重要度を増している
大学設置基準の改正：2017年SD義務化
2022年教育研究実施組織の編制（教職協働の実質化）

◆中央教育審議会 大学分科会副分科会長の村田氏、
「高等教育の在り方に関する特別部会」委員の小林氏が講演会にて以下のとおり発言

小林氏「継続的に改革を推進するためには当事者意識を持たせる組織文化の醸成を」
「教員をサポートする職員の役割は変化した（事務職員から大学職員へ）」
村田氏「大学院修士・博士学位の取得や高等教育に関する文献の学習、セミナーや研究会への積極的な参加などにより高度な専門知識を身に付けてほしい」

◆国にとって『人々の知的活動・創造力が最大の資源である』（我が国の高等教育の将来像（答申）,2005年）ように、龍谷大学にとっても同様である

自主的SD活動「龍谷未来塾」の可能性への考察

◆一般的にSD（Staff Development）は、組織的に学びの機会や環境を整備し、職員の能力を開発する取組を指す

◆今回の未来塾が実施した講演会は、参加者に対して学びの機会を提供し「当事者意識」の醸成に留まった

◆一方で、未来塾の運営側は自主的なSD活動だからこそ、講演会後も考察し議論することで学び続けることができている（学びを深める関係性の構築）

◆この経験を事務職員全体に波及させることで、
知的活動や創造力を活性化させ、大学組織に新たな価値を生み出せないか

学び続け、当事者意識を持つことで
「事務職員」から大学運営を担う「大学職員」へ